

令和 4 年度 県立つくば特別支援学校 自己評価表

No. 1

目指す 学校像	◆安心して生活できる安全な学校 ◆学ぶことが楽しく、みんなの笑顔が輝く学校 ◆保護者や地域社会とともに歩み開かれた学校			
昨年度の成果と課題		重点項目	重点目標	達成状況
・新学習指導要領を踏まえ、各教科の年間指導計画の目標を3つの観点別に設定し、単元の指導内容に段階を明記した。学習指導要領に沿った学習内容を計画したことで、系統的・段階的な指導を計画することができた。今後も各教科の指導について研修を継続し、教科指導の技術を高めることが課題である。 ・自立活動の指導については、外部専門家による研修等を各部で継続的に実施した。今後も教員の専門性を高める取組をより充実させることが課題である。 ・ICT教育推進部が中心となり、タブレット端末等を学習指導に積極的に活用するよう働きかけたことで、数多くの効果的な実践例が挙げられた。更に効果的な活用方法について研修を推進していくことが課題である。		児童生徒の資質・能力を伸ばす指導・支援の充実	①主体的・対話的で深い学びへの授業改善 ②生きる力を育む自立活動の充実 ③ICTを活用した教育の推進	A
・ヒヤリハット事例を蓄積し、重大な事故の未然防止となるように、ヒヤリハット入力フォームを作成して、情報の整理や共有を一元化できるようにした。蓄積したヒヤリハット事例の分析を更に進め、職員の安全面への高い意識を継続させることが課題である。防災については、新型コロナウイルス感染症の感染対策を含めた災害時の避難を想定し、必要な物品や確認事項等を検討、具体化していくことが課題である。 ・いじめや体罰については、児童生徒・保護者へのアンケートを実施し、トラブルに関する軽微な事案も校内で共有・検討することで、いじめの未然防止を図ることができた。児童生徒間のトラブルやいじめ、体罰を見逃さないように、より職員の意識を高めることが課題である。 ・オンラインでの会議やデータの共有化によって、感染症対策を図りながら会議を実施することができた。また、会議の議案の精選によって会議時間の短縮化を図ることができた。教育環境の整備については、教室不足が引き続きの課題であるが、共有教室を複数箇所設置し、各部の学習活動に支障のないようにしていくことが必要である。		健康への意識を高めるとともに、安全で安心な教育環境の充実	④学校事故の未然防止への取組の徹底と校内防災体制の見直し ⑤いじめや体罰を見逃さず、安心して生活できる学校環境の構築 ⑥教育環境・職場環境の工夫と改善	A
・専門職の外部講師、ゲストティーチャー、出前授業等の地域資源を積極的に活用した学習活動を多く計画することができた。これらの活用については、単発的なものではなく系統的で計画的な活用をすることが課題である。 ・日々の学習活動と進路指導を関連させるために、各部での進路に関する取り組みを進路だよりに掲載し、保護者に意識を向けようことができた。教員が、キャリア教育の視点に基づいた教育活動を意識することや福祉制度に関する知識を深めることが課題である。 ・美術作品の出品や展示は、年間をとおして参加計画を立て、児童生徒に活躍の場を提供することができたが、スポーツ大会への参加はコロナ禍のより中止されたものが多かった。校内での記録会や代替大会などを実施したが、それらの活動を外部に情報発信していくことが課題である。		自立と社会参加に向けた教育の充実	⑦児童生徒一人一人の将来を見据えたキャリア教育の推進 ⑧関係機関との連携による進路学習や進路指導の充実 ⑨スポーツ・文化活動をととした教育活動の推進	B
・ホームページにおけるブログの更新は、各部が更新スケジュールを立てて臨み、児童生徒の学習や諸行事の様子を、随時発信することができた。学校公開においてもホームページを活用し、本校教育についての取組や児童生徒の学習活動の動画、『つく特 WEB ART MUSEUM 2021』による作品発表等を行った。11、12月の2か月で1832回の動画再生回数となった。コロナ禍を契機に、新たな学校公開の実施方法として定着が進んだ。更に工夫を凝らした取組を検討することが課題である。 ・コロナ禍におけるPTA活動は、話し合いをオンラインにするなどの工夫がなされた。活動への負担軽減を図ると共に、参加者が主体的に活動していくことが課題である。 ・数多くの市内の小中学校、保育所等訪等の巡回相談の依頼があり、つくば市特別支援教育推進室や関係機関と情報共有や連携を図りながら対応することができた。さらに、センターの機能について情報発信をするとともに、関係機関との役割分担や共同での取組を進めていくことが課題である。		家庭・地域との確かな連携	⑩特別支援教育の理解・促進を促す情報の公開と発信 ⑪主体的なPTA活動の推進 ⑫地域との積極的な連携強化	A

校務分掌

評価項目	具体的目標	具体的方策	重点目標との関連	評価	成果（○）、課題（●）及び次年度（学期）への改善策（◇）
運営部	運営部の各係においては、常に適切な情報共有により連携を深め、学校運営や教員の業務を円滑に進められるようにする。	各係内での話し合いを綿密に行うとともに、教務主任との情報共有や進捗状況の確認を常時行い、運営や計画が滞りなく実施できるようにする。また、課題や改善すべき点なども意見交換し、迅速に対応できるようにする。	①②③④ ⑤⑥⑦⑧ ⑨⑩⑪⑫	B	○校務分掌内での情報の共有、教務主任との連携等を円滑に行うことができ、支障なく各業務の運営ができた。 ●各係で業務内容の見直しを必要とする点がいくつかあった。 ◇業務内容の見直しについては、次年度は各係で試行的に改善を進めていく。
教務係	家庭・地域との確かな連携の実現に向け、家庭や地域から理解と信頼を得られる、新型コロナウイルス感染症対策を講じた各種学校行事、学校公開等を計画・実施する。	各部主事と連携して、保護者のニーズの把握を積極的に行い、コロナ禍における授業体制、保護者懇談会、個別面談、学校行事等の在り方を検討する。また、特別支援教育及び本校の児童生徒の理解・推進を促すために、積極的にホームページを活用した情報の発信をする。	①③⑥⑦ ⑨⑩⑫	A	○各部主事と連携を取り、検討や調整を重ねながら、各種の対応策を講じることができた。 ●コロナ対応から通常の体制への移行を段階的に進めていく。 ●感染対策を講じながらも、徐々に通常の取り組みに移行していくように検討と調整を進める。
	部門間・各部間の情報交換、学校行事等の計画や調整などを適切に行い、教育活動の系統性や連携が図れるようにする。また、児童生徒が安心して生活できる安全な教育環境を保持できるように努める。	各部主事や校務分掌部長との意見交換や情報収集を綿密に行うために、月に1回以上の教務会を設定する。教務会にて、各部の児童生徒に関する配慮事項の共通理解や取り組みの共通理解を図り、連携を深められるようにする。学校行事等の全体に関わる計画は、校務分掌部長等から意見聴取を行って検討事項を集約し、その後の検討が円滑に進められるようにする。	①②③④ ⑤⑥⑦⑧ ⑨⑩⑪⑫	A	○月に1回は定期的に教務会を実施し、各部及び各校務分掌の取り組みの共通理解や感案事項の検討などを実施し、実施や発達年齢に合った教科書の採択に努めることができた。他校の過去の採択情報を参考にした。 ●新年度の取り組みが増えた中で、内容や教育的効果を検証し、更に改善していく必要がある。 ◇それぞれの取り組みについて必ず評価を行い、改善点を明らかにする。
教科書係	適切な教科書の選定及び事務処理を行う。	各学年に実際に使っている教科書を検討してもらい、内容の適切・不適切を確認する。教科書の内容が古くなっているものがあるため、よりよい内容のものを精査する。目録をもとに、採択内容を係で調整する。採択に関する必要数等の参考資料の作成を行う。	①⑥⑦	B	○コロナ感染症対策として、校内の教科書選定委員会は書面で行った。 ●アンケートを実施し、実施や発達年齢に合った教科書の採択に努めることができた。他校の過去の採択情報を参考にした。 ●教科書の内容が古くなっているものがあるため、比較本も含めて、よりよい内容のものを精査する。
	教師用教科書・指導書の整理管理を行う。	一覧を作成する（使用者・保管場所等）。各部内に担当者を置き管理する。貸出簿を作成し、管理を徹底する。また、学期ごとに指導書の使用状況を確認し紛失を防ぐ。	①⑥⑦	B	○一覧表を作成し、学期ごとにチェックをして紛失防止に努めることができた。次年度も教科書を授業に活用しやすいよう管理を行っていく。 ●◇指導用教科書をデジタル教科書に移行できるよう準備をすすめる。
	諸帳簿の適切な管理と運用に努める。	Classroom等を有効に活用して、円滑に諸帳簿作成が行えるように、指導要録、出席簿、会計処理関係関係書類の記入例の提示やマニュアルの作成等を行い、適切な資料提供を行う。	⑥	B	○クラスルームを活用し、職員に情報の共有をしたり、学年ごとに資料を配付する等を行った。 ●●◇突合検査の提出資料ややり方について、年度途中に追加資料の提出等の変更は避けるようにしたい。

運営部	表簿・庶務部門課程係	職員の福利厚生に関する情報提供や配付物を掲示して周知する。	掲示板を有効に活用したり、必要に応じて各部ごとに回覧をしたりして情報提供を適切に行う。	⑥	A	○「心とこころの友運動」は各部の係員で取りまとめをした。職員向けの手と足で描く作品展などの資料と一覧表等を各部で回覧して希望を取り、周知した。
		プロフィール、個別の教育支援計画、個別の指導計画、年間指導計画等の作成・運用の職員への周知を図る。	個別の諸計画や年間指導計画の作成・運用について、作成ガイドブック等をもとに学校全体や各部で確認し、共通理解を図り「何ができるようになるか」「何が身に付いたか」を大切にした授業実践へとつなげることができるようにする。個別の諸計画の書式や記入内容等について、教務、部主事等と連携を図りながら、全職員へ周知、運用できるように進めていく。	①	B B	○各部に係員がいることで、それぞれの部門、各部や課程の状況と課題を知ることができ、共通理解をすることができた。 ○クラスルームを活用し、職員に情報の共有をしたり、作成ガイドブックを学年ごとに資料として配付した。 ●◇個別の指導計画の評価の変更等は1年かけて検討し、準備をした方が良いと考える。次年度も引き続き検討を重ねて行く必要がある。
		教科領域会の円滑な開催と教材の管理、及び各学部の備品と消耗品の保管管理に努める。	学期末を中心に、教科領域会ごとに備品や教材の確認を実施し、取りまとめを行う。 4月、12月に各部・各学年に配置されている備品の確認を実施し、年度末には使用不可の机・椅子の破棄を行う。	① ⑥	B	○予定通り、実施することができた。 ●◇今年度は予算が超らずケアテブルの購入ができなかったとことで、修繕をして使用している状況である。
	渉外係	多くの保護者が参加できる活動内容や参加方法の検討・改善を行う。	他校や地域のPTA活動の取り組みについて情報を収集する。ICT機器を活用し、教員と保護者とコミュニケーションを取りつつ情報共有をし、検討・改善を図る。	⑪	B	○コロナ禍の制限がある中で、保護者同士が連絡を取り合いながら、可能な範囲で活動することができた。また、各担当が委員長と連絡を密にとることで、活動をサポートすることができた。 ●他校の取り組みの情報収集はすることができなかった。 ◇多くの保護者が参加できる方法を検討、取り入れていくようにする。
		PTA本部役員を中心に、情報を発信し、取り組みについて理解啓発を促す。	各行事や取り組みを定期的に発信をするようにする。ペーパーレスや職員の負担軽減のためにブログやメールなど様々な媒体を活用し情報を発信する。	⑪	C C	○案内で動画配信することで、PTA活動を積極的に発信することができ、ペーパーレスを進めることができた。 ●ブログの活用を進めることができなかった。職員への情報発信が不足していることもあった。 ◇速やかに情報発信できる方法を検討していく必要がある。
		地域や近所、学年等のつながりを広げるきっかけとなるような活動を行う。	教員と保護者が連携を図り、リモートやサポーター登録など多くの保護者が選択し、参加できるような実施方法を取り入れながら、書く活動を行う。	⑪	C	○各委員会の中で、活動方法を積極的に検討、改善することで、保護者同士のつながりを広げることができた。 ●◇学年PTAは比較的活動しやすいと思うが、地区PTAは、コロナ禍の制限のあることで、地区ごとの活動の差があった。今後も活動を本当に必要か検討していく。
	基本研修係	若手教員研修（初任・2年・3年）及び中堅教員（6年・12年）研修が円滑に進められる研修態勢を整える。	各年次研修の担当者を中心に、教務・学部主事・学年主任等と研修予定内容・期日等の情報を共有する。授業研究やレポート作成については、学習指導案等の書類の提出日までの予定や手順を詳細に提示することで、計画的かつ余裕をもって進められるようにする。	①②③	B	○年間計画や提出期限などを係で定期的に確認・調整しながら研修を進めることができた。係内ではTeamsを使用し、連絡や書類の共有を行った。 ●公開授業において、指導案集の配付が公開授業ぎりぎりになったり、学年での検討の時間が不十分であることがあった。 ◇指導案作成～配付手順の見直しや、手順の徹底が今後の課題としてあげられる（特に初任者。起案の期日も余裕をもたせた方が良い）。
		各年次研修者が、年次ごとの課題に応じた研修を計画し、関係職員と連携しながら進める。	指導案検討や課題研究に関する調査等を各部・学年と連携しながら行えるようにするとともに、外部専門家にも意見を求め、研修が深まるようにする。授業公開や研究発表については、Classroomのアンケート機能などを利用して多くの感想や助言を得られるようにする。	①②③	B B	○研修の場を設定したり、研修者が所属する部・学年等に、研究への協力を呼び掛けたりすることで、各年次このテーマに沿った研修を進めることができた。2年次の自立活動の授業づくりで、外部専門家の活用ができた。 ○授業研の感想・助言について、感想フォーム以外にも紙媒体で渡したり、直接口頭で伝えたりするなど、研修者に様々な形でフィードバックをしていただいた。 ●授業研後の研究協議をもっと充実させたい（時間を確保したい）。 ◇今年度の反省会の期日を、研究協議の時間として使用する。年次研者同士のグループ研修は、別途行う。
		初任者研修において、本校の特徴を生かした研修内容の充実にも努める。	本校の特徴（知肢併設）を生かし、他部門・他学部での1日体験研修を行う。管理職・校務分掌部長等の協力を得て、各部門の実践的な情報を得られるようにする。	①②③ ④⑤⑦⑧	A	○他部体験を含めた年間15回の校内研修やその他の個別研修等により、充実した研修を行うことができた。
読書活動推進係	読書活動推進係	図書を購入や適切な管理、紹介、貸し出しを通して読書活動の推進を図る。	図書の貸し出しや図書コーナーの利用の仕方について、Classroomや掲示で教職員、児童生徒に伝える。 図書コーナーの利用についてや図書の貸出についてのオリエンテーション資料を作成して提供し、学級学年に図書のオリエンテーション活動を促す。 教職員、児童生徒に購入希望図書を語り、購入し登録する。 破損した図書の修理や廃棄図書のデータ更新を行う。 Classroomや図書だよりで、新着図書や返却日を伝える。 定期的に貸出カードを確認し、返却の督促などを行う。	⑥	B B	○教職員にアンケート調査を実施し、児童生徒の実態に応じた図書を購入して図書コーナーに設置することができた。 ○図書だよりやClassroomを活用して、図書の貸し出しの連絡や新着図書の紹介を行い、読書活動を推進することができた。 ○情報BOXで蔵書の管理（登録や廃棄）をすることができた。 ●◇今年度内に作成したオリエンテーション資料を来年度に活用できるようにする。
		図書室（図書コーナー）利用の改善を図る。	痛んできた分類表示の再作成や棚の小見出しを作成し、見やすく整理整頓しやすいコーナーにする。 図書カウンターの整理整頓をして、備品の管理を円滑にする。	⑥	B B	○図書カウンターの整理をして備品を管理しやすくできた。 ●◇図書コーナーの状況によっては、図書の配置を変更できるように常時配慮をする。
		児童生徒会の図書委員会の活動を提案し、より児童生徒が主体となって運営する図書コーナーを目指す。	児童生徒会の図書委員会担当職員に生徒の活動計画案を提示し、校務分掌の係と児童生徒会の委員会とで連携して図書コーナーを運営できるようにする。 校内実習などの職業に関する授業において活動を提案し、図書室管理の業務を体験できるようにする。	⑥	B B	○図書委員会の活動で、月ごとに本を紹介したり、図書コーナーの整理をしたりすることができた。 ○高等部の生徒が週1回図書コーナーの本棚の整理をして、書架の配置等について関心を持つことができた。 ●◇読書週間のお昼の時間におすすめの本の紹介を放送する等、児童生徒が主体となる活動を設ける。
		「みんなにすすめたい一冊の本推進事業」や校内表彰を活用し、全児童生徒が表彰を受けられる機会を設ける。	Classroomや図書だよりで表彰の機会を事前に宣伝するとともに、定期的に読書冊数を確認し、担任や児童生徒に目標冊数まで近づいていることを伝え、規定冊数に達した児童生徒が速やかに表彰を受けられるよう手続きをする。	⑥⑩	A	○定期的に読書冊数を数えて管理し、年2回の表彰を実施することができた。 ●◇貸出カード以外（学級）での読書冊数を管理することができよう、定期的にClassroom等で各担任に告知するようにする。
		各種芸術祭、作品展、コンクール等への積極的な参加を進める。	各学年の年間指導計画と照らし合わせ、それぞれの学年の図工美術担当教員と連携を図ることにより、スムーズに作品出展ができるようにする。また、積極的に情報発信することで、各種公募展への参加を推進する。	⑨	B	○classroomを活用し、部主事を中心に各種展覧会や公募展等の出展情報を効率よく周知することができた。 ●夏休みの課題に関して、発表展示係と教科領域係との連携がスムーズに進まなかった。 ◇夏休みの課題は教科領域の図工美術係が中心になり運営を行うようにする。
発表展示	発表展示	各種芸術祭や学校公開、web Art Museum上で児童生徒の作品を発表することにより、地域社会への理解啓発を推進する。	地域への情報発信を積極的に行い、できるだけ多くの人が児童生徒の作品を鑑賞できるようにする。	⑨⑩	A B	○ArtExhibitionの巡回展をつくば市役所と牛久市役所の2か所で開催されたことで、一般の方の目に触れる機会が増えた。 ●◇牛久市役所の利用に関しては年度ごとに申請することで可能であるが、つくば市役所に関しては年度が替わった時点で文化振興課に展示ができるかどうかを打診する必要がある。

		各種芸術祭に参加することにより、つくば市や高文連等の関係機関との連携を強化し、作品を通して交流を図る。	チャレンジアートフェスティバルへの参加を通して、地域の施設との作品を中心とした交流を図る。また、美術部と連携し、南連合展への積極的な参加を通して、地域の高校生との交流を図る。	⑨⑫	B	○チャレンジアートフェスティバルへの作品出品を通して、市内の施設担当者との連携を図ることができた。また、県南の高等学校の美術部生徒との交流を間接的ではあるが、作品の鑑賞を通して行うことができた。 ●美術部生徒の参加が現状で難しく、他校の生徒の作品を鑑賞する機会がない。 ◇コロナウイルス感染予防の観点から難しいところはあるが、美術部の活動として県南連合展を鑑賞し、高校生同士の交流を図る機会を設ける。
	ICT教育推進部	G I G Aスクール構想によるタブレット端末の導入に伴い、タブレット端末を含めた教員の I C T活用技術の向上を図る。また、校内の様々な端末を活用して校務を効率的に行うことができるよう、校内システムの構築を図る。また、外部への情報発信や情報資産の適切な管理を行い、業務の円滑化に繋げる。	研修部と連携を図りながら、校務・教育の両面から校内の I C T活用が促進できるような研修会を企画・運営する(年6回以上) また、Microsoft Office365のTeamsアプリを導入した、校内のサーバのシステム構築を行うことで、教員用タブレットを活用した校務を可能として、業務の効率化に繋げられるようにする。 情報発信に関しては、新システム導入に伴った校内運用の改善を行い、情報資産では校内アカウントの整理と管理を行う。	③⑩	C	○ホームページとブログによる情報発信や情報資産の適切な管理、機器の整理については、係全体で協力しながら運用をすることができた。 ●研修の実施やタブレット端末を用いた校務の実現等に関しては、年度始めの見込みよりも進展しなかった。 ◇校務用のパソコンやタブレットを含め800台程度の端末を管理し、システム運用をしていくのは校務分掌としては負担が大きい。今後は、より業務を精選していく必要がある。現状では、校務パソコンの台数不足が分かっており、職員全員が平等に校務を行うための環境整備を行っていく必要があるが、いずれも高度な専門知識と技能を必要とする。
	ICT教育推進部	情報教育	G I G Aスクール構想によるタブレット端末の導入に伴い、タブレット端末を含めた教員の I C T活用技術の向上を図る。また、校内の様々な端末を活用して校務を効率的に行うことができるよう、校内システムの構築を図る。	③	C	○研修部と連携を行い、特教研修など計3回の研修を行った。Teamsの導入では、教材保管場所としてTeamsを開放し、タブレットで教材作成したデータを共有できるようにしている。 ●研修部からの研修依頼が少なかったこと、業務の煩雑さによる日程調整の難しさから研修回数が少なかった。Teams運用もサーバー運用の難しさや、県の今後の運用方針の不透明さがあり、校務を行うまでには至らなかった。 ◇研修については、ニーズはあるので次年度以降も実施していく。Teams運用については、サーバーと対になった運用が必要で、より専門性の高さが求められる。
	ICT教育推進部	情報管理	部ごとに学校ホームページやブログにて、授業の様子や学校行事などの情報発信を行う。	③⑩	B	○学校全体のホームページと各部ブログについては、計画通りに更新を行うことができた。ブログ更新マニュアルはデータ化しており、係担当者や各部担当で更新が可能である。 ●学校ホームページの更新方法が変更となった。以前のシステムと操作が異なる部分が多くなり、編集マニュアルの作成が必要である。 ◇学校ホームページの編集については、特定の職員によることが多かったため、より多くの職員への引継ぎを行う必要がある。
	ICT教育推進部	情報管理	校内の I C T機器の管理簿や管理マニュアルを作成し適切な管理に努める。また、校内アカウント管理簿と運用マニュアルを作成して、円滑な管理に努める。	③	B	○パソコン端末、タブレット端末、I C T教材、付帯物についてのナランピングを行い管理することで、未返却物品について把握できている教員用タブレットは、Formsを活用した所在管理を行っており、持ち出し簿も作成しているで適切に管理できている。 ●未返却物品が多いため、今後も全職員への周知が必要である。 ◇部品整理、アカウント整理など管理事項が多岐に渡るため、管理方法の引継ぎを行っていく。
	生徒指導部	生徒指導	児童生徒が、様々な教育活動に主体的に取り組む中で、互いに認め合う人間関係を築き、安全で安心な学校生活を送ることができるようになる。	④⑤⑥⑦	B	○生徒指導係、特別活動係、通学指導係、部活動・体育係のそれぞれの目標に向けてしっかりと準備、実行することができた。 ●○業務効率を図るために、連携、集約が可能な業務を検討する。
	生徒指導部	生徒指導	児童生徒が相手の思いや気持ちを持ち、互いに認め合う人間関係を築けるようにすることで、いじめを見逃さない安全・安心な学校にする。	⑤⑥	B	○いじめアンケートやいじめ防止対策会議において現状を把握し、必要に応じて継続して児童生徒の交友関係の把握に努めた。 ●隠善特性からいじめと見られてしまうような行為があるため、本人への指導とともに、周囲の理解も進めていく。 ◇アンケート機能の操作方法は、限られた職員だけでなく、複数の職員で操作ができるようにする。
	生徒指導部	生徒指導	児童生徒の日常生活におけるルールや規範意識を高めるとともに、問題行動を未然に防止することができるようにする。	④⑤	B	○各級の児童生徒の実態に応じて、ルールを守ることの大切さを授業で取り入れ、生活のやすく、生活のきまりを生徒に周知した。また、生活のやすく、生活のきまりを見直すことができた。 ●児童生徒の問題行動等は、担当の学年主任、部主事に対応することに加え、生徒指導係にも連絡が来るようにお互いに連携を図る。 ◇次年度は、新たな生活のやすく、生活のきまりの内容を周知していくために、学部会や授業などで取り上げられるようにはたらかせていく。
	生徒指導部	生徒指導	安全教育の推進及び啓発を行う。	④⑦	B	○長期休業前の生活指導においては、生活習慣や外出する際に気を付けること等について映像やパワーポイントを用いて児童生徒に指導した。また、防犯標語のポスターを昇降口等の児童生徒の居やすい場所に設置した。 ●○今後、必要に応じて、防犯グッズの使い方等を紹介していく。
	生徒指導部	特別活動係	児童生徒代表委員会において、話し合い活動を行い、決めたことを積極的に情報発信していく。また、全校集会やマナーアップ運動、1円玉募金、こころの木運動などの活動を通して、人間関係を広げる場や機会を作る。	⑦	B	○代表委員会の1～2週間程度前に紙面で次回の委員会で話し合う内容を伝えただけで、自分の考えをまとめる時間が取られず、当日欠席したときにも自分の意見を反映させることができなかった。活発な話し合い活動を行うことができた。 ○全校集会は動画による視聴形式ではあったが、2学期には全校のクイズ大会を行うことができ、AB間の交流ができた。 ○あいさつ運動や1円玉募金を通して、児童生徒同士の交流が図られたり、代表委員としてみんなの手本となる姿勢を示せたりすることができた。 ●○感染症対策なので仕方がないが、代表委員の児童生徒が、さらにみんなの前に出たり、他部門に行き来したりする機会を設けることで、交流の充実を図っていく。
	生徒指導部	通学指導係	事故なく安全・安心にスクールバスを運行させる。	⑦	B	○大きな事故やトラブル等なく運行することができた。バス停やルート状況などの問題について、早急に対応することができた。また、新停留所の設定等や運行ルート(時間調整等)について、バス会社と相談をし、対応ができた。 ○バス車内の様子や自主自力通学生徒については、毎朝号車担当や自主自力担当者を確認をし、問題等が起これば、早急に対応ができた。 ●バス内でのトラブルなどについては、添乗員や各担任との共通理解・確認が遅れてしまうことがあり、後手になってしまうことがあった。 ◇各号車担当、担任や運転手、添乗員との情報交換を密にとっていけるようにする。
	生徒指導部	通学指導係	自主・自力通学生が事故やトラブルなく安全・安心に通学できる。	⑦	B	○自主・自力通学生対象の交通安全教室を月1回で実施し、改めて交通のマナー等を学ぶことができた。また、生徒間で様々な意見を交換し合うことができた。 ○通学路の立哨指導の実施については、学期毎に定期的に実施することができた。 ●○自主自力通学児童生徒が増加している傾向にあるため、今後も安全に登下校できるよう支援指導していく。

		緊急時や災害時等の対応について、見直しを行い、適切な対応が取れるようにする。	緊急時や災害時等の対応について、連絡協議会等で確認し共通理解を図れるようにする。係内で対応の仕方について見直しを行い、適切な対応が取れるようにする。災害時の連絡手段である災害用伝言版（Web171）の体験を、1学期中に実施できるようにする。諸問題に関して、フローチャートを活用して迅速な解決を図る。	⑦⑧	B	○緊急時や災害時等の対応について、連絡協議会で確認し共通理解を図ることができた。また、号車担当が責任をもって各SB号車と、状況の確認することができた。 ●○災害用伝言版（WEB171）の実施を年度初めのみだけでなく、定期的に実施訓練にする必要がある。
	部活動係	各種スポーツ大会や作品展等に、必要な感染症対策を講じながら参加できるよう、係内で役割を分担しながら計画する。	各部ごとに参加する大会や作品展等の年間計画を作成する。大会、作品展ごとにチームを決め、チームを中心としながら全体で協力し計画及び運営できるようにする。 大会等に参加する際は、感染症対策に十分配慮し、安全に活動ができるように職員間で連携を図る。	⑨	B	○各部の年間計画に沿って、大会や作品展、検定に向けて計画をしたり参加したりすることができた。新型コロナウイルス感染症対策については、本校のガイドラインや主催団体から提示されたガイドラインに沿って、引率者で共通理解を図りながら対応することができた。 ●参加する大会や作品展の精選。 ◇特に運動部については、その年の生徒の実態や技術に応じて参加する大会を検討する。
		スポーツや芸術活動に取り組む楽しさを感じたり、技術を高めたりできるような指導・支援を行い、卒業後の生活につなげられるようにする。	生徒が達成感や充実感を感じることができるよう、各部ごとに生徒の技能や体力に応じた活動内容を検討し、指導・支援を行う。 地域のスポーツ教室や大会等の案内を配付し、生涯学習として地域とつながる機会や情報を提供できるようにする。	⑨	B	○生徒一人一人の実態や技術に応じて、活動内容を検討しながら指導をすることができた。また、できる力を発揮して充実感を味わうだけでなく、粘り強く挑戦することでできた達成感も味わえるように指導することができた。 ●卒業後の生活につながる支援の充実。 ◇個人で参加できる大会や練習会、作品展等の情報を文書やホームページ（部活動）等で発信する。
	保健指導部	児童生徒が健康を保ち、安全な学校生活を送るために必要な体制と環境の整備、学習支援や教員研修を行う。	より安全な学校を目指して、地域や家庭、関係機関等との連携を図りながら、感染症対策を考慮した方法を検討していく。	①②④⑥	B	○児童生徒の健康と安全を考え、方法を工夫しながら、地域や家庭、関係機関等と連携して指導・支援の充実を図ることができた。 ●児童生徒が安全に学校生活を送ることができるように、引き続き環境整備や教員研修を行う必要がある。 ◇現状の課題に向き合い、改善に向けた方策を検討し、一つ一つ取り組む。
保健指導部	保健指導係	児童生徒一人一人の心身の健康状態を把握し、健康管理と衛生指導に努める。	手洗い、歯磨き等の保健に関する指導を養護教諭と担任、部内係間や他分掌部係等とも連携して取り組む。教職員一人一人の健康管理に対する意識を高め、養護教諭と担任等が連携することで、心身の健康状態を適切に把握できるようにする。	④	C	○学校歯科医や養護教諭、担任等で連携して手洗いや歯磨き、性に関する指導等を行うことができた。取り組みの中で、教職員の健康管理への意識向上も図ることができた。 ●指導の際の言葉や活動内容が対象児童生徒に合っていないことがあったため、養護教諭や担任等との事前の連携を十分に行う必要がある。 ◇事前に、指導を行う関係者間で十分に連携を図ることで、対象児童生徒の実態に合った指導を行う。
		児童生徒の体調急変時や事故等における対応及び未然防止策に関する知識の向上を図る。	手洗い、歯磨きを含めた保健に関する指導を養護教諭と担任、部内係間や他分掌部係等とも連携して取り組む。教職員一人一人の健康管理に対する意識を高め、養護教諭と担任等が連携することで、心身の健康状態を適切に把握できるようにする。		B	○各学年で想定される事例を考え、8月までにすべての学年でシミュレーションを実施することができた。 ●より多くの教員が実際の救急時対応に必要な知識を身に付け、適切に行動できるようにする必要がある。 ◇実際の対応やシミュレーションで学んだ反省を生かして、必要な情報を今後も周知していく。併せて、効果的な情報の共有方法を検討する。
			ヒヤリハットに関する知識を深めるために、係からヒヤリハットに関する情報を提供する機会を増やす。併せて、ヒヤリハットの積極的な発信と情報共有、改善策を考える機会の設定を推進する。また、児童生徒の安全意識を高められるように、児童生徒保健委員会等と連携して、児童生徒がヒヤリハットに関する情報発信と注意喚起を行う機会を設ける。	④	B	○ICTを活用することで、情報共有と積極的な事例発信を促進することができた。児童生徒保健委員会からヒヤリハットの発信や注意喚起を行い、児童生徒自身の安全意識の向上を図ることができた。 ●ヒヤリハットの発信がただの報告になってしまっている事例がある。また、発信をためらう職員が少数だが存在する。 ○事例発信のポイントや活用例を提示する。教員間でヒヤリハット報告に対する抵抗感を軽減するような言葉掛けをし、積極的に報告し合える環境づくりに努める。
			実施方法を工夫して、坐楽実技研修や食物アレルギー対応研修、普通救命講習、医療的ケア研修（痰の吸引等）等の研修会を行う。学校生活における児童生徒の安全確保につながる知識を深められるように、研修会の内容を検討する。	④	B	○少人数制で実施回数を増やしたり、実地研修に動画視聴を組み合わせたりして研修会を行った。実施後アンケートの結果は好評で、より多くの教職員の知識向上を図ることができた。 ●教職員の現状とニーズに合った内容を今後も検討していく必要がある。 ◇児童生徒の安全確保につながる知識をより多くの教職員が深められる内容や実施方法を検討する。
	防災・環境整備係	避難訓練や引き渡し訓練等の実施方法を検討し、各訓練や防災教育を通して、災害発生時の初期避難行動や避難経路の確認を行う。	避難訓練や引き渡し訓練等において、密を回避できるように実施方法について検討を行う。各訓練では、初期避難行動や避難経路の確認など、児童生徒とともに安全な避難ができるようにする。訓練の想定については、被害状況や天候など、さまざまな想定で訓練を実施できるように計画、実施をする。また、災害に関するスライド等を準備し、事前学習に活用したり、災害時に実態に応じて児童生徒が命を守る行動をとったりすることができるよう防災教育を実施する。	④	B	○避難訓練とは別に避難経路を確認する期間を設けたり、避難経路に関する動画や避難行動に関するスライドを準備することで、児童生徒に安全な避難を繰り返し指導することができた。 ●当日の天候や感染症の状況により、実際に屋外に避難する回数が少なかった。全校一斉の屋外避難は実施できなかった。 ◇天候や感染症の状況に柔軟に対応できるように訓練計画をする（代案を準備しておく）。また、訓練の実施が難しい状況を想定して、指導に活用できる教材を準備する。
		コロナ禍における福祉避難所の開設を想定し、校内の運営体制を検討し、職員間で共通理解を図るとともに、保護者に適切に周知する。	コロナ禍における福祉避難所の開設を想定し、マニュアルの見直しを行い、改訂を検討していく。福祉避難所に関する情報発信のツールとして防災だよりを発行し、必要な情報を保護者に周知していく。また、運営体制について検討した内容について、避難所開設の主体であるつくば市に適宜確認する。	④	C	○係から防災だよりを発行し、家庭で災害に備える必要性について、情報発信をすることができた。 ●感染症流行時の福祉避難所の開設の運営体制について、設置主体であるつくば市とさらに確認が必要である。 ◇感染症流行時の避難所開設時の対応や役割分担を協議し、より明確にしていく。
		校内の清掃用具や防災関連用具などについて、衛生的かつ安全な教育環境を整えるため、定期的な点検や管理を行う。	年2回のモップ交換や清掃用具の管理や不備への対応、毎月の安全点検を行う。安全点検では、毎月係からのアナウンスを行い、周知を徹底していく。また、本校設置の防災倉庫の備蓄品の整理、購入や発電機などの点検を定期的に行う。	⑥	B	○安全点検の集約方法を見直し、集約した点検内容や修繕内容を事務室担当者や管理職と情報共有しやすくなった。 ●保存水やガスボンベなど使用期限の備蓄品の購入計画の検討が必要である。 ◇使用期限や保存期間を確認し、購入計画に係を検討する。
食育推進		給食時における事故の未然防止、衛生的な環境づくりに努める。	児童生徒の食事に関する実態把握をし、必要に応じて食形態の変更を考え、給食委員会での検討をする。また、今年度は特別食の食形態の見直しを行う。感染症対策の一環として、給食当番（教職員含む）健康観察表を活用し、衛生的な配膳や異物混入の予防に努める。調理実習など給食以外を摂取する場合の注意点を呼びかける。	④	A	○アンケートや教員の試食会、給食委員会での検討等を行って特別食の食形態の見直しを進め、次年度の食形態を決定することができた。 ○次年度の食形態について、見学会や面談時の動画視聴の機会を設けて、保護者の方々が理解や選択しやすいようにできた。 ●○給食の配膳に関する苦情も異物混入も今年度は少なかったが、引き続き呼びかけていく必要がある。
		児童生徒及び保護者、職員に対して情報を発信し、安全で楽しい食育の推進を図る。	毎月食育だよりを発行し、食育への意識を高める。食に関する指導の全体計画を活用し、自立活動係と連携しながら、必要に応じて助言や授業参加を行ったりして、教職員一人一人が個に応じた食の指導を実践できるようにする。	④⑥	B	○毎月食育だよりを発行し、食への理解、食育への意識を高めることができた。 ●自立活動係と連携しての授業参加等は行えなかった。 ○自立活動係との連携方法を探っていく。
		児童生徒の学習や日常における進路指導、卒業後支援に還元できる情報の収集と共有の推進を図る。	関係機関との情報交換を継続し、職員や保護者に提供する。 卒業生支援係と連携しながら、卒業生の状況を把握し、必要に応じて関係機関との情報交換を行い、支援方法を検討する。 情報発信の内容や方法を検討し、試行する。	①⑦⑧⑩	B	○校内実習見学会については、高等部1年生の保護者は実際の見学会の実施、そのほかの学部学年に対しては、動画配信形式で実施することができた。 ○保護者向けの福祉事業所説明会については、地域の福祉事業所にご協力いただき、動画視聴形式で実施することができた。 ●次年度以降の福祉事業所説明会の在り方、進め方の検討。 ◇説明会の参加事業所の選定方法、毎年なのか隔年なのか等実施スタイルの検討。

進路指導部	進路指導係	関係機関との積極的な連携を強化し、進路学習や進路指導に生かせる情報を職員向けに発信する。	積極的な企業・福祉施設訪問と連絡調整により情報収集する。 福祉サービスの制度等に関する職員向け研修会や施設見学などを設定し、職員の福祉制度への理解を促進する。	⑦⑧	B	○企業や福祉事業所とのやりとりで得た情報を、必要に応じて担任や保護者に提示することで、進路選択の一助となるようにした。 ○福祉サービス制度に関する職員向けの研修会を、オンラインで実施した。 ●職員への進路指導の流れの説明を充実できるとよい。 ◇職員向け進路指導ハンドブック等の再整備。
		進路指導で発信する情報の内容や方法を見直しながら、教員・保護者に向けた積極的な情報発信に取り組む。	進路指導だよりや懇談会等を活用した情報発信方法の工夫を検討する。 進路掲示板の掲示内容の定期的な更新を行う。 各部会等における情報発信と保護者説明会との連動を図る。	⑦⑧⑩	B	○保護者が福祉事業所の情報収集する際の一助となるように、進路だよりで、校内の進路コーナーについて紹介した。 ○各学部とも保護者懇談会での進路指導の流れの説明を実施した。特に現場実習が来年度に迫る高等部1年生保護者には、実習の流れや進め方についての説明の機会を設定した。 ●地域の企業や福祉事業所等への学校の取り組みを知ってもらう機会の設定。 ◇リモート機器や動画視聴等の方法による情報の発信。
	卒業後連携係	・同窓会総会、成人を祝う会の運営が円滑に進められるように役員会と連携をとりながら実施をする。 ・同窓会会加入者への連絡方法について、メールやアンケート機能の活用を進めていく。	役員会で同窓会、成人を祝う会の計画を立案する際に、事務局として支援をしながら、計画と実施ができるようにする。 同窓会、成人を祝う会の計画立案をする際、卒業生が参加しやすいまたは、参加しなくなる会が開催できるように役員会でアドバイスをする。 ・同窓会加入者へメール配信サービスへの登録手続きを進めていく。年2回、登録手続きへの案内文を配付する。(案メを活用していく)	③⑪⑫	A	○つく葉会役員会と連携をとりながら、二十歳を祝う会の計画運営を進めることができた。 ○今年度の卒業生から、会員への連絡方法として、メール配信サービスを活用していくことができた。 ●今後の同窓会総会、二十歳を祝う会の実施内容について検討。 ●メール配信サービスへの加入者を増やしていく。 ●同窓会総会を会員が来校して実施するのか、二十歳を祝う会の参加者を増やしていくのかなど、実施計画を検討する。 ◇今後加入するつく葉会会員は、全員がメール配信サービスの登録をしていく。
		・卒業生進指導の記録を更新、整理をし、情報の共有化ができるようにする。	担任、係、現場実習巡回担当職員の協力を得ながら、効率的に追指導を実施する。 追指導名簿（年度別・事業所施設別）と記録の作成を行う。 卒業生の情報を共有し指導に活かすため、追指導の記録を進路指導部内での供覧、各部会などで報告を行う。 追指導を通して移行先との連携を図り、必要に応じて移行支援会議を行う。	⑫	B	○卒業生進指導について、進路指導主事が来校する際にも行うことで、各教員への負担を軽減することができた。 ●卒業生進指導の対象者、追指導の実施回数、追指導記録などの検討を行う。 ◇追指導記録などの検討。必要に応じて、高等部学部会等で卒業生進指導について、報告をして、情報の共有化ができるようにする。
		・進路を選択する際の参考にできるように、同窓会の活動や卒業生の動向に関する情報を随時発信する（卒業生の進路先での様子について、ホームページで紹介していく。）	進路だよりに卒業生の様子を紹介する記事や同窓会に関する記事を掲載する。 ホームページ（ブログ）の更新に努める。 各部会等で卒業生の様子について、必要に応じて紹介をする。 成人を祝う会などの活動内容について教職員に向けて、Classroom等を通して紹介をする。 卒業生の進路先での様子について、卒業生、保護者、進路先と連携を図りながら、ホームページにて紹介をする。1年に1回の更新、夏休みまたは冬休みに更新予定。	⑧⑩⑫	B	○ホームページにて、A・B部門卒業生の様子や動向などについて、紹介することができた。 ●つく葉会の活動の様子、卒業生紹介の内容などををはじめ、ホームページ掲載内容の検討が必要。 ◇他のホームページ等も参考にしながら、掲載内容の充実を図っていくことで、同窓会の活動や卒業生の動向に関する情報を発信していく。
	キャリア研修部	新学習指導要領における「主体的・対話的で深い学びへの授業改善」を目指し、児童生徒の実態把握及び授業における目標設定と評価を明確にし、PDCAサイクルを定着する授業づくりの充実を図る。	教員全体に向けては、教員一人一人がPDCAサイクルを意識した授業づくりについてサポートする一方で、年次研修者等による授業研究においては、基本研修係と連携を図り、複数の教員で目標設定の妥当性や客観的な評価、授業改善などを協議・検討する場を設定するなど、チームとして授業づくりを支えられるような体制づくりをする。	①②③⑦	B	○計画訪問や肢体不自由教育部門の授業改善研修の研究授業を通して、PDCAサイクルを意識した授業づくりについて教員の意識を高めることができた。 ●授業改善の協議・検討の場の確保については、働き方改革に関連して更に検討を要する。 ○次年度も授業改善研修等を設定し、両部門で研修の充実を図ることのできる体制を確立する。
		タブレット端末やデジタル教材など、ICT機器を活用した指導の充実を図る。	校内においては月1回の研修日を設定して、ICT機器の活用について学校全体で取組む。教員の意識調査から、ICT機器の利活用の状況を把握し、教員の興味関心から研修内容を設定したり、「ビギナーコース」、「スタンダードコース」など、教員の実情に応じたコースを用意するなど、きめ細やかな研修体制で臨む。	①②③⑦	B	○月1回の校内研修において、教員個々の実情に応じたICT研修を行うことで、スキルアップを図ることができた。 ●研修の成果の共有については、更に検討を要する。 ○次年度もICT機器の研修に留まらず、両部門や各部の実情や教員個々のニーズに応じた、多種多様な内容や形態の校内研修、年次研修、自立活動研修等を計画・実施する。
キャリア研修部	研究推進係	ICTを活用した授業（教材作成～授業実践～評価～改善＝PDCAサイクル）を実践し、授業におけるICT活用の充実を図る。	月1回の校内研修を通して、教材作成や授業実践のまとも等を行い、「授業実践事例シート」を作成する。また、作成した教材及び「授業実践事例シート」を共有することで互いの実践を学び合う機会を設ける。	①②③⑦	B	○ICTを活用した授業が実践され「授業実践事例シート」としてまとめ、classroomにて共有することができた。（グループ・個人から36の実践事例シートが集まった） ●授業でICTを活用する場面が増加するにつれ、活用されるアプリも多様化しており、そのための研修時間が必要となっている。 ○多様化するアプリの研修を、全てを実施することは難しいため、必要の多いものは校内研修に取り入れ、その他は自己研修を促す方向が現実的であると考えられる。
	自立活動支援係	内外部専門家（PT、OT、ST、心理士）と協働して、児童生徒の実態把握や目標設定を行い、個別の指導計画に基づく自立活動の指導の充実を図る。	個別相談や授業全体の相談、ケース会議を定期的・継続的に実施し、実態の捉え直しや目標の妥当性の検証、評価等を多角的な視点で行う。個別相談においては、多様なニーズに柔軟に対応していくとともに、コロナ禍における相談の実施方法を検討し実施できるようにする。相談内容や助言が引き継いでいけるように、指導・支援に生かせるように連携シートの見直しを行う。	①②⑦	B	○連携シートを通して内外部専門家の先生と、連絡・報告・相談を円滑に行うことができた。 教員のニーズに合った相談を行うことができた。 ●係が担任と外部専門家との調整をする必要がある。 ◇教員のニーズに対応できるよう、担任、係、専門家が連携して相談を進められるよう方法を工夫する必要がある。
		各部のニーズに応じて、部研修や情報提供を通して、自立活動の専門性の向上を図る。	相談内容等から各部のニーズや課題を把握し、各部や部門ごとに自立活動に関する研修会を実施する。必要に応じて情報が見られるように情報提供の方法を工夫する。	①②	B	○アンケート機能を活用することで、各部のニーズをしっかりと把握することができた。学部研修後のアンケート評価で参考になったとの回答が多く、自立活動の専門性の向上を図ることができた。 ●聴講型の研修会になってしまった。 ◇多様なニーズにさらに応じられるよう研修の実施方法、内容をさらに工夫する必要がある。
	現職研修係	新学習指導要領に基づいた、主体的で深い学びを実践できる研修会を企画する。	研究推進係と連携して研修内容を企画する。ICTの活用に関して、実際の授業場面に生きた実践に即した研修を行う。ClassroomやFormsを活用して、実務を円滑に処理する。	①③	B	○ICT機器の活用について、研究推進係と連携して研修を行うことができた。実際に活用されている具体例を中心に、実践に即した研修を行うことができた。 ●ICT機器の活用が得意な教員とそうでない教員の差に対応できていない。 ◇教員のニーズを意識しながら、テーマを絞った研修を計画していく。
地域支援センター		職員の人権意識の向上を図るために、人権重点政策に沿った研修会を企画する。	近年の学校の実態や過去の研修歴から、法務省が掲げる人権啓発活動強調事項、(7)「外国人の人権を守ろう」について取り上げ、人権啓発につながる研修を企画、実施する。	①⑤	B	○外国人の人権について、講師の先生を招いて研修を行うことができた。 ●人権意識を高めていくためには、継続して定期的に研修していく必要がある。 ◇今後も様々な人権課題について継続的に研修していく。
		地域の特別支援教育の理解や推進を促す取組を実施し、必要な情報を発信する。	各関係機関と連携を密にし、ニーズに応じて効果的な取組ができるようにする。 ホームページ等を活用した情報発信や必要事項の周知を効果的かつ迅速に行うようにする。	③⑩⑫	B	○各関係機関と連携を図り、ニーズに応じて特別支援教育のセンター的機能の役割を果たすことができた。 ●わかりやすい情報発信のためにホームページの構成や内容を工夫する。 ◇申込、相談、文書送受等をインターネットを活用して行えるように推進する。
		本校の児童生徒や職員だけでなく、交流や連携を図る地域の関係機関のニーズや課題も適切に把握し、充実した学習や学校生活につなげる。	感染症対策に配慮しながら、教育的効果を考慮しながら様々な形態で交流や連携を図るようにする。	①②⑩⑫	B	○感染症対策に配慮した結果、多様な交流や連携を図ることができた。 ●交流や連携が多様になった反面、共通理解が難しい部分があった。 ○校内外の共通理解を円滑に図ることができるようマニュアルやフォーマットを見直すようにする。

地域支援センター	就学前連携係	就学対象児や保護者への本校の就学に関する情報を提供し、本校の教育活動の理解につなげる。	入学後の生活をイメージできるように、小学部主事と連携をしながら体験入学を計画し実施する。本校の教育活動を理解してもらえるように内容を精選し、親しみやすく分かりやすいものにする。	⑩	B	○年間3回行われた体験入学の内容については、AB部門の部主事と確認して行うことができた。 ●◇引き続き、内容や回数について精選、吟味していく必要がある。
		本校に就学する見込みの対象児が笑顔で学校生活を始められるように、充実した体験入学を計画・実施する。	一人一人の実態把握ができるように、実施日を数日間に設定し、分散して少人数の形での体験入学を計画する。その際、教室や教員の確保を確実にする。内容については、係で計画して楽しく安心感をもてる体験入学を実施する。相談支援係が担当する「特別支援教育巡回相談」で、対象児の情報を得ている場合には事前に連携し、体験入学の活動内容に生かす。	⑩⑪	B	○今年度はA部門の授業体験を夏季休業中に行うことで、多数の教員を確保することができ、余裕をもって授業体験を行うことができた。B部門は、授業体験を3日間に分けて行うことで、少人数で実施でき、一人一人に丁寧に対応することができた。 ●◇感染予防対策が変わってきたので、日数や回数について再検討するとい。
	相談支援係	〔校内〕校内支援体制の向上を図り、児童生徒一人一人に応じた指導、支援の充実に努める。	学年や部で支援が必要な困り感について、必要に応じて支援に関するケース会が実施できるような体制作りを推進する。 全体での協議が必要な場合には、積極的に校内支援会議を開催する。 児童生徒の的確なアセスメントができるように、係内での研修会や全体への情報発信を行う。	①②	B	○学年や部の要請に応じて校内、及び関係機関と連携してケース会を実施することができた。 ●校内支援体制について全職員への周知が不足した。 ◇必要な支援を行うために進路指導部、キャリア研修部自立活動係などの各校務分掌と連携を図り情報収集を行うようにする。
		〔校外〕巡回相談など、地域の学校等のニーズに応じた指導や支援を行い、センター的機能の充実に努める。	つくば市特別支援教育推進室をはじめとする各教育委員会や地域の学校等と連携を図る。 地域の学校等に在籍する特別に配慮を要する児童生徒の指導、支援について助言を行う。	⑩	B	○幼稚園、保育園、学校と連携を図りながら巡回相談を実施することができた。 ●積極的に教育委員会と連携を図ったが、センター的機能の役割を果たすために説明が不十分な部分があった。 ◇説明や助言を行う際には、資料を準備して具体的に進める。
	地域啓発・交流係	地域の行事や学校間・地域交流に児童生徒や地域の方々が有意義に参加・活動できるよう、計画を行う。また、障害への理解や個性を尊重した態度・人格の育成につながるよう、担当者会議や実行委員会を充実させ、地域の行事や学校間・地域交流の実施を行う。	おひさまサンサン生き生きまつり、高文連（総文祭）、交流活動の計画を円滑に進められるよう、連絡調整を細やかに、担当者・関係機関で連携を図る。また、保護者や相手校・本校の担任、行事の担当者等と打ち合わせを十分に、地域の行事や学校間・地域交流を行う意義や目的に沿った実施ができるようにする。	⑩	B	○高文連では、学校行事や研修が実行委員会の日と重なることがあったが、担当で調整を行い、円滑に計画・準備を進めることができた。部門大会では、美術作品の展示や学校紹介動画の放映、PR活動などを通して、啓発活動を行うことができた。 ○交流に関しては、係内で役割や担当者を年度初めに決めたことで、計画通りに進めることができた。 ●交流の手続きに関して、分かりづらい点があり、担任と確認や連絡調整を行うことがあった。 ◇間接、直接交流の手続きと様式の見直しを行い、手続きの流れが統一できるようにして、分かりやすくする。
		行事や交流活動の様子、教育活動の情報公開を行い、障害のある児童生徒への理解を地域に促進する。	交流活動の様子や教材教具の紹介を学校ホームページやブログに掲載し、障害理解の啓発となる、情報発信を図る。	⑩	B	○教材教具シートのホームページ掲載では、ICT係と連携して、教材数のバランスをとったり、掲載の形式を変更したりして、閲覧しやすいように改善を図り、情報発信することができた。 ○校内掲示用の学校紹介・作業班紹介パネルの更新を行うことができた。 ●ブログの掲載が昨年度より少なくなってしまった。 ◇掲載対象となる活動をより具体的に提示したり、掲載文書の例を提示したりすることで、係の教員が主体的に作成できるようにする。
事務部	学校予算の適正な配分と執行	・各部各科における予算要求の取り纏め。 ・事務室主導による施設整備の計画的改修。 ・上記2点を踏まえた年間予算の策定と効率的な執行。		⑥	A	○R4年分として取り纏めた要求分の執行は100%執行できた。 ○今後数年に渡るエアコン改修工事について財務課と調整が完了した。 ○校舎外敷地のスロープ改修について今年度設計に入ること財務課と調整がついた。
	教育環境の整備・改修	・増築校舎に係る整備を適切に実施。 ・施設設備の劣化等に起因する危険箇所の早期対策。 ・厨房を含む中長期的な整備計画の作成と、年次的整備の実施。		⑥	B	○増築校舎に係る整備は追加予算を含め順調に執行中。 ●施設整備の危険箇所には即時対応している。予算の関係で難しい箇所は主管課に繋ぎ予算請求を行っている。 ◇厨房は順次改修中、完成までに数年かかる予定である。
	ICT環境の整備	・ICT教育推進のため調達した機器の効果的利用計画策定への参加。 ・費用対効果の高いICT機器及びソフトウェア利用における指針の作成と予算確保。		③	B	○情報部と意見交換を行い、各種計画を策定できた。 ◇ただし、県の運用方針が急遽変更になったため、計画の変更が必要となった。予算は確保したが、執行にはなお時間が必要である。

知的障害教育部門

評価項目		具体的目標	具体的方策	重点目標との関連	評価	成果（○）、課題（●）及び次年度（学期）への改善策（◇）
小学部		一人一人の発達段階や特性、教育的ニーズに応じた系統的な指導を行い、主体的に学習に取り組む態度を育む。	個々の実態や特性を的確に把握し、個別的教育支援計画や指導計画に基づいた指導の充実を図る。 各教科における個々の目標と評価を明確に示し、系統性のある指導・授業を展開できるようにする。 児童が主体的に取り組める授業づくりや、ICTを活用した授業を展開できるように努める。	①②③ ⑦	B	○体験的な活動や、見通しと成果がわかりやすい授業づくりが各学年で工夫され、児童が主体的に学習に取り組む姿につながった。電子黒板（ミライタッチ）やiPadを授業で活用する機会が増えたことも効果的だった。 ○PTやOTなどの外部専門家からの助言を、個々の目標達成に向けた日々の授業実践の改善に活かすことができた。 ●年度初めに記入しているチェックリストや発達段階表を、毎日の学校生活の中で即時評価につなげていくことが難しかった。 ◇児童個々の発達段階や目標、それに対する評価を学校生活で常に意識できるように、既存のチェックリストの効果的な活用方法などを工夫するなどの改善が必要である。 ◇教材教具やICT機器を使った効果的な授業実践について、教員間で情報を共有し、学部全体で有効に活用できるように、共有ドライブの活用や学部会での実践紹介などの工夫が必要である。
		健康で丈夫な体をつくるとともに、基本的生活習慣の習得と定着を目指し、自分でできることを増やしていく力を育む。	体を動かすことの楽しさを感じられるような授業を展開するとともに、感染症等への意識を高める指導を行う。 着替えや食事、排せつ等の基本的生活習慣について、保護者と連携しながら個々の実態に応じた指導を行う。	①②④ ⑤⑦⑨	B	○環境設定や消毒等、必要な感染症対策をしながら、トレーニングや体育などの運動に取り組むことができた。着替えや食事などの基本的生活習慣については、手順表や即時評価によって見通しや意欲をもたせながら、わかりやすく毎日取り組むことで、着実に身につけていくことができた。 ●感染症対策による活動場所や集団作り等の制限が続き、個々の運動能力に合った授業展開が十分にできないことがあった。 ◇感染症対策の継続を見こし、体育館以外の特別教室やグラウンドおよび中庭なども計画的に活用できるように、教室の確保や割り当ての工夫をする必要がある。
		将来の社会生活や自立に向けて体験的な学習活動を通して、豊かな人間関係や社会性を育む。	適切な方法で人とのかかわる力を育てられるよう、個に応じた指導の工夫・改善に努める。 社会生活に必要なスキルやルールを身に付けられるように、守るべきルールを分かりやすく明確に示す。 係活動や役割、手伝いなどの体験的な学習活動の中で、達成感や成就感を味わい、思いやりの気持ちを育てるよう支援方法の工夫をする。	①②③ ⑦⑧⑫	B	○人とかかわり方や社会生活における決まりや約束について、イラストなどで可視化したり、実態に応じたルールを利用しながら機会を意図的に作ったりすることで、見通しをもって反復しながら学習をすることができた。 ●今年度5、6年生に新たに加わった道徳科について、さらなる授業内容の充実を図る必要がある。 ◇豊かな人間性や社会性を児童それぞれの発達段階で育てるために、道徳科についての深い理解や生活単元学習等を含めた系統的な学習展開を工夫する必要がある。 ◇児童にとって家庭でも身近になりつつあるタブレット端末の利用について、余暇活動につながる使い方と授業理解を深める使い方の両方の役割を意識しながら、教員間であらためて学校での利用のしかたを共通理解をしていく必要がある。
1年		児童一人一人の実態や学習・生活上の課題から目標を設定し、小集団の中で学習や活動に取り組む姿勢を育む。	児童の実態把握をし、学習や生活の課題を明らかにした上で目標や手だての設定を行う。教員間で共通理解を図りながら、指導の充実に努める。 学習や活動への動機づけを丁寧に行い、見本や写真や手順表を提示したり、体験的な活動を取り入れたりした授業作りを行う。また、分かりやすい評価をし、達成感を味わえるようにする。	①②③ ⑦	B	○実態に応じて手順表を活用したり、花丸カードを使ってその都度評価を行った。生活単元学習では、手洗いや歯磨き、秋の木の葉拾いなど、体験的な学習を多く取り入れることができた。 ●グループ分けによっては担任以外の児童を担当することもあるので、他の学級の児童についても実態や課題をよく把握できるとよい。 ◇学年合同で授業を行うこともあるので、他の学級の児童の実態や目標も把握できるとよいので、学年会等で、学年間で他の学級の児童について理解を深めていく。
		体を使った活動や遊びを大切にし、運動の楽しさを知り、体の動かし方の基礎を学ぶとともに、基本的な生活習慣を身に付けることができるようにする。	体育やトレーニング等で、発達段階に応じた動きを取り入れたり、楽しみながら体を動かすことができる活動を取り入れたりする。また、休み時間等には、体を動かす遊びを取り入れ自ら体を動かすことができるようにする。 毎日の生活の中で、写真カードや具体物や手順表などを提示し、自分から取り組めるような言葉掛けを行う。	①②③ ⑦⑨	B	○体育では、さまざまな動きを段階的に取り組むことができた。トレーニングでは、ダンスを取り入れることで、楽しく体を動かすことができた。着替えや支度の際には、実態に応じて手順表などを活用した。 ●広い場所でのトレーニングを行うことができなかった。 ◇外に出る活動を増やしたり、体育館などの広い場所を使える時間を増やせるとよい。
		学校生活に慣れ、小集団での簡単なルールを守り、友達や教員と一緒に過ごすことができるようにする。	一日の流れや活動内容が分かるような教材を工夫する。 自立活動や遊びの指導の授業で、友達や教員とかかわりを重視した活動を取り入れ、集団での約束事を理解できるようにイラストや実際の動きを提示したり、個別に行動の仕方を伝えたりする。	①②⑦	B	○児童に伝える際には、イラストを用いることで内容がよく伝わった。事前に約束事を伝えることで、児童が約束を意識して活動や学習に参加することができた。 ●ルールや約束の内容が分かっているにもかかわらず守れないことがあるので、守れるようにする支援を工夫していく。 ◇ルールや約束が守れない時に、守れるようにする効果的な支援や活動の設定を考えていく。
		児童の実態に応じた目標を設定し、一人一人ができたことを実感できる実践を行い、自ら学習や活動に取り組む姿勢を育む。	目標や課題の設定、支援の手だてについて教員間及び保護者との話し合いのもとで共通理解を図り支援を行う。 系統性を踏まえ、スモールステップでの学習を大切に授業作りを行う。授業の始めに、目標、学習内容を明確に提示すると共に、児童に分かりやすい評価方法の工夫をする。	①②③ ⑦	B	○授業における個に応じた目標を押さえ、授業の目標や活動内容を児童に分かりやすく伝えたことで、自ら学習活動に取り組む姿が見られるようになった。 ●「やってみよう」「なぜだろう」等学習への動機付けに工夫が必要。 ◇学習に意欲的に取り組むことができるよう、見通しをもって単元に取り組むための単元構成の工夫や個に応じた学習活動や支援の充実に努め、学習の定着を図っていく。
		様々な運動の経験を重ね、できる運動を増やし、正しい体の動かし方を学ぶことができるようにする。また、一人一人の基本的習慣の課題を捉え、段階的な指導を行いながらできることを増やしていく。	個の実態に応じた目標を設定し、楽しみながら体を動かしたり、運動量を確保したりする活動内容やグループ編成の工夫に努める。 基本的な生活習慣の課題や支援の手だてについて保護者と共通理解を図り、取り組みの情報交換をしながら支援を行う。	①②⑦ ⑨	B	○個の実態に応じた目標を、児童に分かるように伝え、活動したことで、児童が達成感を味わいながら運動することができた。 ●児童が意欲的に取り組むための教材の工夫が必要。 ◇主体的に運動することができるよう、児童が興味関心を持ち、且つ動きを引き出すような教材等の工夫に努める。
		学年の集団の中で、ルールを守って生活し、友達や教員とかかわりを通して、自分の気持ちを伝えたり、調整したりする力を育む。	自立活動や遊びの指導の授業の中で、友達と関わる場面を意図的に設定し、気持ちの伝え方や調整の仕方について個に応じた支援を行う。日常生活や授業の中で、約束をイラストや簡単な言葉で伝え、約束を守っている場面で称賛したり、授業の振り返りで分かりやすい評価を行ったりして、ルールについて意識できるようにする。	①②③ ⑦	B	○友達とかかわりが増え、自分の気持ちを伝えたり、かかわり方を学んだりする機会が多く、かかわりの幅が広がった。 ●相手の気持ちを考えたり、自分の気持ちを調整したりすることが課題。 ◇児童の気持ちに寄り添い、個に応じた丁寧なかかわり方の振り返りをしていく。良いかかわり方ができた時には賞賛し、日常生活に生かすことができるようにしていく。また、学校での様子を保護者と共有し、支援の連携を図る。
2年		児童一人一人の実態に合った目標を設定し、「わかる」授業づくりを工夫し、児童が主体的に活動に取り組むことで、「できた」が実感できるようにする。	引継ぎ資料等の確認や教員間及び保護者との連携を取ることで、児童の実態を十分に把握し、適切な目標や課題の設定を行う。 児童が活動に見通しをもって主体的に学習できるように、学習内容を可視化して提示したり、自己選択・自己決定場面を設けたりする。教科、学習内容によってICT機器の活用が有効であるかを判断した上で、積極的に活用する。 次の課題につながるような適切な学習評価ができるように、具体的な目標を提示する。	①②③ ⑥⑦	B	○児童の実態から個に応じた目標を設定し、手順表を活用したり、イラストやパワーポイント、ミライタッチを使用したりすることで、見通しや興味をもって主体的に学習できた。 ●ICT（フィンガーボード）等を取り入れてより主体的に学習できる環境をつくれるとよい。 ◇児童の活動様子を動画撮影し、それを視聴することで、次の授業での課題を具体的に提示できるようにするのはではないか。

小学部	3年	安全に配慮しながら運動量を確保し、正しい動きで体を動かすことで、体力が向上するよう努める。また、基本的な生活習慣について、目標を段階的に定めて定着を図る。	個の実態を十分に考慮し、一人一人が楽しみながら体を動かすことができる活動内容や、運動量を確保できる活動形態の工夫に努める。速さを競う運動ばかりではなく、じっくりゆっくり丁寧に体を動かすことができるようにする。個の達成状況の情報交換をしながら、適切な目標を定め、保護者と連携し、家庭と一貫した支援をして、基本的な生活習慣の習得を促す。手洗いやうがい等、感染症予防についての学習を継続的に行う。	①②③ ⑦⑨	B	○活動する場所のスペースに応じて運動内容を変え、安全に配慮しながらできた。 ●体育館での授業では、課題別に分かれて活動することで、児童の実態に合った活動内容で運動量を確保できたが、教室や中庭での活動はクラスごとになってしまい、運動技能の高い児童に十分な運動量を確保することは難しかった。 ◇限られたスペースを有効活用したり、学習の活動順を変えるなどして、課題別のグループで学習できるようにする。
		友達や教員とのかかわりを通して、自分の要求や気持ちを伝える力を育む。また、きまりや約束を知り、気持ちの調整をしながら、友達と一緒に仲良く活動できるようにする。	自分のやりたいことを言葉や身振りで伝えたり、選択肢から選んで伝えたりする場面を多く設定する。また、友達との日常のかかわりやルールのある遊びを通して、気持ちを伝えることや、気持ちの調整が必要となる場面を意図的に設定する。日常生活や各教科の学習で、約束をイラストや簡単な文章で提示し、仲良く活動するためには、それらを守ることが大切であることを伝えていく。	①②③ ⑤⑦	B	○気持ちや要求を伝える場面を意図的に多く設けるようにしたことで、児童によっては選択肢を使って、伝えられるようになった。 ●授業中や一日の振り回しなどパターン化された場面では、気持ちや要求が伝えられるようになってきたが、日常生活の中での般化には至っていない。 ◇発達のない児童が朝の会等の進行をする際、ICT機器を活用して、児童が主体的に進められるような工夫が必要。
	4年	児童一人一人の実態に合った目標を設定し、一人一人にとって「わかる」授業づくりや「できた」を実感できる評価の工夫を行い、児童が主体的に学習に取り組むことができるようにする。	教員間及び保護者として連携を図りながら、児童の実態を十分に把握し、目標や課題の設定を行う。児童に目標や学習内容を可視化し分かりやすく伝えることで、見通しをもって主体的に学習に臨めるようにする。また、児童ができたことを自己評価できるように工夫し、系統性のある授業を展開できるようにする。ICT機器の積極的な活用や、実態に応じたグループ学習を設定することで、より個に応じた主体的な学習ができるようにする。	①②③ ⑦	B	○実態に合った目標で授業づくりができた。ICT機器を活用して分かりやすく目標に近づくことができた。各授業において振り返りの時間をしっかり確保したことで、児童が「がんばった」「できた」を実感し、次の学習につなげることができた。 ●支援の方法等において、教員間で違いがある部分があった。 ◇ICTの適切な活用を進め、視覚的に学ぶことのできる学習を多く取り入れ、理解を深めるようにする。教員間や保護者との連携をさらに強め、児童ができるようになったことを日常生活で活かせるような支援に結び付けられるように工夫していく。
		安全に配慮しながら運動量を確保し体力の向上に努める。また、様々な運動経験や日常生活を通して、体幹を鍛えられるようにする。基本的な生活習慣において、達成点と課題点を把握し、児童一人一人ができることを増やし定着を図る。	トレーニングでは、学年やクラスで過密化を避け安全を確保しながら個に応じた学習内容を設定する。継続して体を動かす機会を設け、体力の向上を図る。実態に応じたグループを編成して運動を行ったり、目標の様々な場面で、適切な姿勢や体幹強化を意識した支援を継続的に行ったりする。保護者と連携して、実態に合わせた目標を設定し、家庭と一貫した支援をして基本的な生活習慣の定着を図る。	①②③ ④⑤⑦ ⑨	B	○短時間でも毎日トレーニングの時間をクラスごとに行うことで、安全面に配慮しながら個の目標に合った様々な運動に取り組むことができた。 ○基本的な生活習慣については、連絡帳や面談等を通して、家庭と連携して支援の手立てを講じ、日常生活の中で反復して取り組むことで、定着してきている。 ●教室で体育を行うことも多く、十分な運動量が確保できないことがあった。 ◇体育館や中庭、グラウンドなどを有効に活用して、運動量の確保に努める。
		友達や教員とのかかわりを通して、自分の気持ちを伝えたり、調整したりする力を育む。また、きまりや約束を知り、友達と一緒に活動できるようにする。	自分の要求を言葉や身振りで、選択によって表現する場面を設定したり、友達とルールのある遊びをする機会を作ったりする。意見が分かれた時には教員が間に入り手本を示したり、どうしたらよいかを一緒に考えたりしながら一人一人の目標に合わせて支援する。日常生活や各教科の学習で、決まりや約束をイラストや簡単な文章で提示して意識付けする。	①②③ ⑦	B	○実態に応じたツールで、要求や気持ちを表出するようにしたことで、他者に伝えようとする場面が増えた。学校生活での約束を掲示したり、折に触れて話したり、授業で学習したことで、約束を守ろうと意識する児童が増えた。 ●グループ学習などでは、教員によって児童への支援に違いがでることがあった。 ◇グループ学習や家庭などでも個に応じた支援が一貫してできるように、教員間や家庭との共通理解を図る。
	5年	児童一人一人の発達段階や特性に応じた目標や課題を設定する。また学習指導の充実を図るとともに適切な支援を行い、児童が主体的に学習に取り組むことができるようにする。	教員間及び保護者と連絡帳や面談等で連携を図りながら、児童の実態を把握し目標や課題設定の検討と実態に応じた支援方法の工夫等を通して、児童が主体的に学習できるようにする。外部専門家相談を活用したり教員間で共通理解を図ったりし、一貫性のある支援、指導を行う。また児童に目標や学習内容を可視化し分かりやすく伝えることで見通しをもって主体的に学習に臨めるようにする。	①②③ ⑦	B	○外部専門家の助言を学年会等で共有することで、適切な支援を行ったり、課題点への共通理解を図ったりすることができた。 ●各授業での実態別グループ編成や学習環境、課題設定に課題があった。 ◇学習内容等を協議し、授業の進め方や編成を工夫していく。また、様々な経験の機会を計画的に設定し、評価を行っていく。
		安全に配慮し、様々な運動経験や継続的な運動を通して、体力の向上を図る。基本的な生活習慣において、達成点と課題点を把握し、児童一人一人ができることを増やし、習得と定着を図る。	継続して体を動かす機会を設け、体力の向上を図る。トレーニングでは、定期的に短時間の持久走を行ったり、実態に応じたグループ編成を行い、児童同士の距離をとる等の安全を確保しながら実態に応じた運動を継続的に行ったりする。保護者と連携して、各児童の実態に合った目標を設定し基本的な生活習慣の定着を図る。	①②④ ⑤⑥⑦ ⑨	B	○持久走等を継続的に行うことで、体力の向上を図ることができた。 ●運動量の確保と生活年齢に応じた支援に課題があった。 ◇トレーニングや体育で連携し、徐々に運動量を向上させていく運動を取り入れられるように、授業計画を行う。また、学年会や学級等で生活年齢相応のかかわり方や活動等を共有し指導、支援していく。
		きまりや約束を守り、学校生活を送ることができるようにする。また児童同士や教師とのかかわりを通して、自分の気持ちを相手に伝えたり、調整したりする力を育てる。高学年としての異性や異年齢の人の接し方、成長に伴う体の変化等を知ることができるようにする。	活動の中できまりや約束について、事前にイラストや簡単な文等で提示し意識できるようにする。児童同士がかかわったり自分のやりたいことを選択したりする場面を設け、意見が分かれた時には教師が間に入り手本を示したり、どうしたらよいかを一緒に考えたりしながら一人一人に合わせて支援していく。保健室と連携し、思春期における体の変化について学習するとともに、日常生活においても言葉遣いやパーソナルスペースについて意識できるようにしていく。	①②⑤ ⑦	C	○定期的に約束やきまりを確認することで、意識したり守ったりすることができた児童が増えた。 ●自分のやりたいことがある時等に約束を守ることが難しいことがあった。また、他者とかかわり方については、学習した内容を般化させていくことが難しかった。 ◇継続して約束ルール等について確認していく。他者とかかわり方についても繰り返し学習の機会を設け、確認していくとともに学校生活の中でも個別に評価、指導を行い定着を図っていく。
	6年	児童一人一人の実態を把握し、発達段階や特性に応じた目標や課題を設定する。授業の充実を図り、個々の目標と評価を明確にし、児童が主体的に取り組むことができるようにする。	保護者と共通理解を図り、児童の実態を十分に把握し、目標や課題の設定を行い、学年職員全体で児童の支援を行うようにする。授業では、「わかる」授業づくりや「できた」達成感を味わえるような授業、個に応じた支援方法の工夫などをおとして、児童が主体的に学習に取り組めるようする。	①②③ ⑦	B	○教員間で連携を図り、支援の方法の共通理解を図ったり、支援の見直しをしたりした。外部専門家の相談を受け、学年職員で共通理解を図ることもできた。また、教材研究や教材の工夫など、学年で情報交換を行いながら進めることができた。 ●クラスだけでなく、学年全体で支援の方法を確認する時間を定期的に設定できるとよかった。 ◇学年全体でも支援の方法や見直し、課題の確認等を共通理解する場を定期的に設定できるようにしていく。
		基本的な生活習慣において、達成点と課題点を把握し、日常生活でできることを増やしていく。様々な運動をおとして、体力の向上や持久力を養い、健康の保持増進を図る。	個々の課題を把握し、日常生活や授業をおとして、個に応じた支援を行い、基本的な生活習慣の定着を図る。トレーニングや体育の授業の中で、様々な運動を取り入れ、正しい動きや体の使い方を確認したり、体を動かす機会を多く設けたりして、運動量を確保していくようにする。うがいや手洗い、消毒などの定着を図り、感染症対策や健康な体づくりを意識できるようにする。	①②③ ⑤⑦⑨	B	○トレーニングや体育、自立活動において、感覚運動や粗大運動、アジリティトレーニングなど、実態に応じた活動を取り入れ、十分に体を動かすことができた。 ○個に応じた体の動きについては、トレーニングや自立活動で個別に対応する時間を設定したが、時間が限られているので、十分に時間をとることは難しかった。 ◇昼休みだけではなく、遊びの中で体を動かす時間を多く設定できるようにしていく。
		きまりや約束を守り、安全に学校生活を送ることができるようにする。自分の気持ちを適切に伝えたり、相手の話を聞いて考えたり、思いやりの気持ちを育てる。また、異性や異年齢の人の接し方、成長に伴う体の変化等を知ることができる。	学校生活の中で、きまりや約束を繰り返し伝え、社会生活に必要なスキルやマナー、言葉遣いなどを意識できるようにする。教師や友達とかかわりをおとして、自分の気持ちや相手の気持ちを聞いて考えることを体験的に学習していくようにする。異性とかかわり方や体の変化に関する学習を行い、日常生活の中で異性との接し方を意識できるようにする。	①②③ ⑥⑦⑧	B	○実態に応じてきまりや約束を児童自身で守れるように支援し、状況に合わせて、言葉遣いや感謝の気持ち伝える等を意識して生活できるようにしてきた。児童一人一人の考えや思いを受け止め、安心できる環境作りをすることができた。 ○成長に伴う体の変化については、その都度、個別に対応しながら進めることができた。 ●個別の対応することはできたが、授業の中ではなかなか取り上げることが難しかった。 ◇今後も保護者と情報交換をしながら、成長に伴う体の変化や体調管理など、連携を図っていく。

中学部		個々の障害の特性、発達段階、生活経験に応じた学習指導を実践し、学んだ力を活用できる力を育てる	個別的教育支援計画、指導計画をもとに、生徒個々の課題や目標を明確にすることで、指導内容や支援の手立てを具体化していく。 部内の教員が情報を共有しながら、学ぶことの楽しさを味わうことのできる学習指導計画を作成していく。教材においてはICTを積極的に活用していく。	①②③ ⑥⑦	B	○個別の指導計画や個別的教育支援計画をもとにICT機器の活用（ロイノート・スクリーン等）し、新しい生活様式に対応した学習形態や指導の充実ができた。 ●道徳・生活単元学習等の指導内容について、教科性も含めて検討が必要である。 ◇課程会等で指導内容を精選し明確化することで効果的にねらいを達成できるカリキュラム・マネジメントをする。
		基本的生活習慣の確立を図り、生活年齢に相応した行動や人とかかわる力を育む。	生活年齢を意識した言動、公衆道徳などを日常的に指導しながら、自ら意識できる環境を整えていく。 人とかかわりの中で適切な距離感、他者の心情などを考える機会を多く設定することで、自分の考えや意思を適切に伝えられる力を身に付けていく。	①②④ ⑤⑥⑦ ⑧	A	○コロナ禍を意識しつつ、生徒が主体的にかかわり合いをもてるような環境設定や支援を実施することができた。 ●○コロナ禍での新しい生活におけるコミュニケーションや社会参加などの支援を時代に合わせ改善する必要がある。
		自立と社会参加への関心を高め、自己の課題を改善する力や自己決定できる力を育む。	キャリア発達を踏まえ、働くことに関する学習の機会を設定し、将来への夢や希望をもって、職業に関する知識の習得ができるようにする。 社会生活で必要とされる事柄について考える学習活動や体験活動を設定し、自らの課題や必要なスキルに気づき、それらを自主的に改善できるように支援していく。	①②③ ⑦⑧⑫	A	○中学部キャリア教育全体計画を作成し、指導に対し意味付けや価値付け、重み付けをして指導を行うことができた。 ○作業強化週間、作業製品販売など、「働くこと」に関する体験活動等を多く取り入れ、学習を充実させることができた。 ●キャリアパスポートの書式を設定したが、効果的な運用を検討する必要がある。 ◇本年度初めて作業強化週間を実施したが、教科・校外学習との関連付けをして、指導内容を深めていけるとよい。
中学部	1年	生徒の実態を的確に捉え、授業の目標設定と評価を工夫しながら授業実践を行い、生徒が主体的・意欲的に取り組む態度を育む。	一人一人の障害特性や発達段階を、学年及び学部内で共通理解できるように努める。 各授業では、学習内容や目標の提示の仕方を生徒に分かりやすいように工夫したり、支援方法を工夫したりすることで、生徒が主体的・意欲的に取り組めるようにする。また、学習の評価は、ワークシートやタブレット端末等を用いた自己評価など、評価方法を工夫することで生徒が「何ができるようになったか」、「何が身に付いたのか」が分かるようにする。	①②③ ⑦	A	○生徒の実態についての共通理解を行いながら、学習内容や目標を提示して毎時間授業を行うことができた。生徒の実態に応じて、実態別のグループ学習をしたり、ワークシートや動画、別途資料を提示したりすることで、主体的・意欲的な活動を促すことができた。 ○学習の評価については、ワークシートで到達度の確認をしたり、タブレット端末で撮影した写真や動画で振り返ることで自己評価の場面を設けることができた。 ●○生徒の主体性や意欲をさらに引き出すために、状況に応じてタブレット端末のアプリ（ロイノート、フィンガーボード等）を授業に活用することができるよう理解を深めていけるとよい。
		「挨拶」や「言葉遣い」、「身だしなみ」などの基本的生活習慣の確立を図り、生活年齢に相応した行動や人とかかわる力を育む。	日常生活の指導や各教科の指導を通して、個に応じた適切な経験を積み重ねることで基本的生活習慣の確立を目指す。また、連絡帳や個別の指導計画等で家庭との連携を図り、系統的な支援を行えるようにする。	①②⑤ ⑥⑦⑫	A	○「挨拶」や「言葉遣い」、「身だしなみ」等について、チェック表を用いたり、題材を設定して授業を行うことで生徒の意欲を高めることができた。また、学校生活全般をととして適宜、指導・支援を行うことで基本的生活習慣の確立を図ることができた。 ●○「言葉遣い」においては、敬語が使えずに友達や目上の人に対し命令口調であったり、乱暴な言い方をしてしまったりするため、日常の指導で定着を図りたい。
		将来への生活に向け、自己の課題に気付くことができるようにするとともに、自己肯定感を育めるようにする。	生徒が自ら考えたり、行動したりする場面を多く設定することで、自己の課題に気付いたり、課題達成による成功体験を積み重ねることで、課題解決への意欲を高められるようにする。また、自分の役割を最後まで果たしたり、他者に感謝されたりする経験を通して自己肯定感を育めるようにする。	①②⑦	B	○学校生活の中で生徒が困ったときや困難な状況にあるときに教師が「どうすればよいか」を考えることを「グリーンカード」を活用しながら、実践する機会を取り組んできた。多く設けることで、生徒の課題解決能力を高めることができた。また、望ましい行動が見られたときには、すぐに称賛することで、よい行動の強化を図ることができた。生徒においても、達成感を味わいながら自己肯定感を高めることができた。 ◇「グリーンカード」の活用を徐々に減らし、自分の役割を最後まで果たし、自己肯定感を高めていきたい。
	2年	生徒の実態を的確に捉え、課題に応じた分かる授業を展開し、学んだことを日常生活に活用できる力を育む。	個別の指導計画をもとに、生徒の障害特性や発達段階について学年内で共通理解を図り、課題に応じた授業内容を設定できるようにする。また、授業においては、板書の仕方を統一し学習内容や目標を分かりやすく提示する。 生活に根差した学習内容を設定するとともに、ICTを積極的に活用することで、指導内容の充実を図る。	①②③ ⑥⑦	B	○新しい学習単元に入る前に、個別の指導計画をもとに生徒の目標について学年職員で共通理解を図ることができた。生徒の目標達成へ向け、各々の課題に応じた授業内容を設定し授業を行うことができた。 ○ICT機器の特性を踏まえ、タブレット端末のアプリケーションを適宜使用しながら、指導内容の充実を図ることができた。 ●○ICT機器については、さらに研修を深め、引き続き積極的に活用していくことができるようにする。
		「返事」や「報告」、「依頼」など、生活年齢に相応したコミュニケーション力の育成を図り、「衣服の調節」や「清潔」、「体調の管理」などの基本的生活習慣の確立を図る。	積極的にコミュニケーション場面を設定し、場や個に応じた適切なコミュニケーションの取り方を指導する。また、他者との適切ななかかわりの中で楽しさや心地よさを感じられるようにすることで、コミュニケーションを取ることに意欲を高める。 基本的生活習慣の確立を図るために、日常生活の指導や生活単元学習の指導を中心に、場面や状況に応じた適切な経験を積み重ねられるようにする。また、学んだことをもとに、生徒が自ら考え判断し、適切な行動をすることができるよう支援する。	①②⑥ ⑦	B	○名前を呼ばれたらすぐに「返事」をできるようになった生徒が増えたり、自分から「報告」や「依頼」を行うことができたという場面が増えた。また、対教師だけでなく友達同士とのコミュニケーション場面も増えてきた。 ○基本的生活習慣の確立については、生活単元における「身だしなみチェック」や日常生活の場面で適宜指導を行うことができた。生徒自ら整えようとする意欲もみられた。 ●まだ不十分な生徒も多い。家庭との連携も必要である。 ○身だしなみチェック表を持ち帰り、保護者にも確認を促したり、学年だよりや懇談会等で協力を依頼したりする。
		将来への社会参加への関心を高め、自分の得意なことや苦手なことなどの特性や課題を知り、自己肯定感を育みながら自己の課題を改善する力を育む。	職業・家庭や総合学習での調べ学習や校外学習において、働くことへの関心を高め、働くことへの知識を習得できるようにする。 各教科・領域や、特に作業学習において、得意なことを生かしながら取り組めるように支援方法を工夫し、生徒が得意なことに自信をもつことで自己肯定感を高められるようにする。また、苦手なことにも挑戦できるように課題設定を工夫することで、自己の課題解決へのスキルを習得できるようにする。	①②③ ⑦⑧⑫	A	○職業・家庭での高等学校内作業実習の見学（オンライン、事前に撮影した動画の視聴）や、学年内での実習（封筒づくり、ボールペン組み立て等）を行った。事後のワークシートには、生徒が「大きな声で挨拶をできるようにする」や「態度に気を付けて報告をする」など自己の課題を記載することができ、働くことの意義や意欲を高めることができた。また、自立活動ではコミュニケーションスキルや発音などの自己の苦手としている課題にも積極的に取り組むことができてきている。
	3年	生徒一人一人の課題を的確に把握し、個々の指導計画に基づいた適切な支援・評価を行うことで、生徒の学習意欲を高める。	一人一人の障害特性や発達段階を共有し、個別的教育支援計画等に対する共通理解を高める。また、それらを十分に活用することで、生徒の実態把握や共通理解、将来に向けた課題の共有化を図り、生徒の課題や手立て、評価についての意見交換を活発に行い、より適した支援に取り組んでいく。	①②③ ⑥⑦	A	○生徒の一人一人の障害特性や発達段階を共通理解することができた。また、日頃から生徒の課題や達成できたこと等の意見交換をし生徒たちの支援・指導に生かすことができた。 ○評価についてはワークシートを活用したり、職員間で意見交換したりして新たな手立てや次の活動に繋げることができた。
		自分の役割や決まり等に対する考えをもち、適切な言動や生活習慣・態度について実践を深める。	身だしなみや言葉遣い、異性とかかわり方に関する指導を日常的に行うとともに、学校生活全般で個々の課題に応じた支援を継続的に行う。また、学習内容や個々の様子について、保護者にも伝え、共通理解することでさらに基本的生活習慣の定着を図る。	①②④ ⑤⑥⑦ ⑧	B	○日頃から、身だしなみや言葉遣い、異性とかかわり方などについて指導を行った。また、生活単元学習などの授業で取り扱い理解を深めた。 ○学習内容や生徒の様子を連絡帳や面談、電話等で伝え保護者との共通理解をとることができた。 ●異性間の距離感については、指導後時間が経つと近くなってしまう。 ◇必要に応じて、適宜距離感について継続的に指導していく必要がある。
		将来の社会参加に向けて、自己の特性と課題を知り、自己肯定感を育みながら、課題改善に努力する態度や自己決定できる力を育てる。	生徒が自分で考えて行動したり、振り返りをする機会を多く設定したりする。成功体験の積み重ねができるような環境作りにも努め、自己肯定感を育めるよう支援する。また、自分の課題に対し何をすれば良いのか考える機会を設定し、改善しようとする態度を養っていく。	①②③ ⑦⑧⑫	A	○生徒自身が考えられるような言葉かけや考える場面を設定した。適宜、賞賛したり感謝の気持ちを伝えることで自己肯定感を育むことができた。 - また、日々の学校生活や校外学習等を通して生徒自身の課題を改善する方法など一緒に考えたり、考える時間を設けたことで改善しようとすることができた。

高等部		生徒の実態を考慮しながら、課題に沿った指導内容を精選し、自立した生活を営むために必要な知識・技能の習得とその定着を図る。	自立と社会参加に向けた実践的な指導を行い、生徒が自信をもって実践できる知識や技能の定着を図る。 必要に応じて外部専門家と連携し、生徒の実態や特性に応じた指導内容の充実に努める。	①②③ ⑨	A	○卒業後の生活を見通し、実態に応じた知識・技能の習得のために、個別の指導計画や学習内容を検討し、計画的に取り組むことができた。 ●指導内容や教材等の情報を共有し、効果的に活用していけるように課程会等の充実にを図る。 ◇今後も、必要に応じて研修会や専門家等に相談を行うなど、知識や専門性をさらに高めていく。
		生徒自らのニーズに応じた生活を送るために、自他への理解を深め、状況の変化に適切に対応できるようコミュニケーション力を育てる。	自分の得意な面を生かしながら、苦手なことも克服しようとする思いに寄り添った支援や指導を行う。 卒業後の生活やコミュニケーションツールとして、効果的なICTの活用法や知識の習得を目指す。	①②③ ⑤	B	○タブレット端末を活用したコミュニケーションや授業での意見交換など、実態や場面に応じた活用をすることができた。 ●生徒同士のかかわりの中で、自己理解や他者を思いやる気持ちを育てていけるようにする。 ◇学部で共通理解を図りながら、系統性のある指導に引き続き取り組んでいく。
		生徒の実態や適性に合わせた進路指導の充実に図り、生徒が卒業後の生活をイメージして、自らの目標や課題に取り組む意欲や行動力を育てる。	校内実習や現場実習などを通して、生徒一人一人が自分の将来について考えることができる授業を展開する。 保護者や関係機関と連携し、共通理解を図りながら進路指導や移行支援を行う。	①②③ ⑦⑧⑩ ⑫	B	○社会自立に向けて自分の課題や改善策を考えながら、校内実習や現場実習に取り組むことができた。 ●移行先の状況や新規情報など、学部全体で共通理解を深められるようにしていく。 ◇関係機関や保護者との情報共有を図りながら、取り組んでいく。
高等部	1年	生徒の発達・特性に応じた指導内容や方法を検討して、生徒の意欲的な活動を推進し、必要な知識・技能の習得と定着を図る。	適切なアセスメントにより、生徒の発達・特性の把握に努める。単元ごとの個々の目標や評価を明確にしたりICT等を活用したりすることで、「できた」「分かった」が実感できるような授業づくりを進める。	①②③ ⑥⑨	A	○単元ごとに個々の目標や支援の方法を確認しながら、授業づくりを進めることができた。 ●個々の実態に応じたICTの活用をしていく。 ◇ICTの活用の充実や専門家等への相談等を行い、「できた」「分かった」がより実感できるようにする。
		生徒同士のかかわりを通して、自他の良さに気づき、集団の中で活動するために必要な力を育てる。	学年会等で個々の生徒に関する理解を深め、指導方針を共有する。オンライン等を活用して学級の枠を超えた生徒同士のかかわりを増やし、自分や相手の良さに気付いたり、自分の成長や変容を実感したりできるような活動の工夫を行う。	①②③ ⑤⑥	B	○学年レクリエーションやダンスフェスティバルのグループ活動では、学級や課程を超えて直接かわり、意見をを出したり自分の役割を果たしたりすることができた。 ●生徒同士が互いに認め合い、自主的に協力し合える雰囲気を作る。 ◇話し合い活動や自立活動、道徳科などで、自他の理解や生徒同士のかかわりを深められる活動や支援の工夫をしていく。
		一人一人の将来を見据えたキャリア教育を推進し、自立への意欲や、自分の役割・仕事に進んで取り組む態度の育成を図る。	職業科や作業学習、校内実習、実務学習等の活動に意欲的に参加するとともに、定期的に活動を振り返る機会を設定する。活動の振り返りを分かりやすく蓄積し、一人一人に応じた指導・支援が行えるようにする。	①②③ ⑦⑧⑫	B	○校内実習や校外学習を通して、自分に向いている作業を考えたり、働くために必要な力を確認したりすることができた。 ●実習や作業学習以外の活動でも、課題を意欲できるよう支援していく。 ◇課題に対する支援や移行先の情報について、保護者や進路担当と連携を密にとり、一人一人の適性に応じた進路を考えていけるようにする。
	2年	生徒の実態を考慮しながら、個々の課題を的確に捉え、一人一人の障害の状態等に応じた目標設定や支援方法の工夫を充実させ、必要な知識・技能の習得を図る。	個々の障害による困難等の実態を踏まえた適切な目標設定と具体的な指導内容・方法の工夫を図る。意欲的に取り組む学習の中で「できる」「分かる」「人とかかわる楽しさ」が実感できるような授業づくりを進める。	①②⑥ ⑦⑧⑨	B	○実態に応じた特性を考慮しながら、個別の指導計画の目標の設定や支援方法の工夫を図ることができた。 ●学んだことを実生活に汎化させることができるように、引き続き系統性をもって継続的に支援する。 ◇適切な支援をしていくために、必要に応じて専門家等に相談を効果的に活用し、授業づくりや日々の支援に生かしていく。
		他者とのかかわりを通して、コミュニケーション能力の向上を図り、状況の変化に応じたかかわり方を身に付ける。	生活単元学習や総合的な探究の時間、自立活動等の学習において、対人関係や集団活動を円滑に進める力を高められるような、話し合い活動や協働活動などを積極的に取り入れる。ICT活用による個々の障害の状態等に応じたコミュニケーションツールを生かし、状況に応じた言葉や考え、意思の表出が行えるようにする。	①②③ ⑥⑦⑧	B	○学年の生徒同士がかかわり合うことができるような協働活動を行うことができたことで、個々の障害に応じたコミュニケーション方法で学びを深めることができた。 ●学年の生徒だけでなく、様々な人と適切にコミュニケーションを図る機会を増やす。特性に応じたICTの活用をさらに充実させる。 ◇ICT活用による個々の障害の状態等に応じたコミュニケーションツールを生かし、学年全体で統一した支援方法を確立する。
		個々の実態や進路希望等に応じた職業教育の充実に推進し、自立と社会参加に向けた必要な知識やマナー、態度を育てる。	職業科や作業学習、現場・校内実習、職場実務学習などの実践的な活動を通して自己理解を深める。卒業後の進路に対する意識を高め、自己決定能力や課題解決能力の育成を図ることができるよう、学習内容の精選や個に応じた課題の設定を行う。	①②⑥ ⑦⑧⑨	B	○今年度初めての現場実習に取り組み、社会自立に向けて個々の良さや改善点を把握することができた。 実習先で予め想定できる状況に対応する力や解決する方法を学ぶことによって、環境の変化がある場で力を発揮することができた。 ●移行先の状況や情報などを適切に把握し、進路担当と共通理解を図ることが必要である。 ◇進路決定においては、最新の情報をもとに保護者との情報共有を図りながら、取り組んでいく。
	3年	卒業後の生活を見据え、社会参加や働く力を身に付けるために、生徒一人一人の実態に応じた教科学習及びキャリア教育等を実践することで知識、技能の習得を図る。	生徒の長所や課題等の把握に努め、社会参加や働くために必要な力につながる指導内容、授業づくりを進める。また、授業の目標やねらいを明確にし、一人一人の実態に応じた支援方法の工夫をするとともに、生徒自身が「できた」「分かった」が実感できる授業づくりを行う。	①②③ ⑥⑦⑧	A	○個別の指導計画のもと、卒業後の生活に生かすことのできる実践的な学習内容を生徒の実態に応じて進めることができた。また、ICT機器を授業の中で効果的に活用することで、目標やねらいを視覚的に分かりやすく伝えるときにもタブレット端末等を生徒自身が操作することで、「できた」「わかった」をより実感することができた。 ●振り返りの時間を充実させることで、自己理解や他者理解をより深めることができるようにしていく。 ◇振り返りの時間の中で、自分の考えを書いて発表したり、友達のことを聞く時間を設定したりすることで、自己理解や他者理解につなげる。
		様々な場面での人とかかわりを通して、コミュニケーション能力の向上や良好な人間関係を構築できる力を養い、お互いの良さを認め、協力し合いながら生活できる態度を身に付ける。	他者とかかわりを通して、ICTの活用を含めた個々の実態に応じたコミュニケーション方法を獲得し、実践するために話し合い活動や協働活動等の学習を多く取り入れる。また、卒業へ向けて生徒同士や学年全体の絆が深まるような学習活動の工夫を行う。	①②③ ⑤⑥⑦	B	○修学旅行事前学習では、学年縦割りグループで生徒中心の話し合い活動を多く設定した。生徒同士のかかわり合いを通して、お互いを認め合う良好な関係を築くとともに、協力しながら様々な活動に取り組むことができた。 ●コロナウイルス感染症対策ということもあり、授業等で他学年生徒と一緒に活動がほとんど実施できなかった。 ◇コロナウイルス感染拡大状況が続く場合は、オンラインでの他学年とかかわり等も含めて検討していく。
		生徒の適性や保護者のニーズを的確に把握し、関係機関との連携を図りながら、一人一人の実態に応じた進路指導を行う。	生徒の学校での様子を詳しく伝えることや家庭のニーズを聞き取ることで連携を密にし、卒業後の生活を一緒に考え、生徒一人一人に応じた移行先を見つけていく。また、進路指導部との情報交換を適宜に行い、見通しをもてるような情報を早めに提供することで、連携を密にししながら進めていく。	①②③ ⑦⑧⑫	B	○進路帳や個別面談を通して、生徒、保護者の進路希望やニーズを確認するとともに、生徒の実態や進路希望先との適性等を伝えることができた。また、保護者からのニーズや情報を進路指導部と共有することで、連携を密にしながら実態に応じた進路指導を進めることができた。 ●どのような点で相談支援事業所を決めた方がいいのかを、述べている保護者が多くいた。 ◇学年懇談会や進路から配付されるプリントで、相談支援事業所にかかわる内容を詳しく説明していく。

肢体不自由教育部門

評価項目	具体的目標	具体的方策	重点目標との関連	評価	成果（○）、課題（●）及び次年度（学期）への改善策（◇）
	児童の実態把握を的確に行い、一人一人の能力を伸ばすために個々に応じた指導や支援の工夫と改善に努める。	外部専門家の意見や発達検査の結果を参考にし、個別の指導計画において児童にとって必要な目標を具体的に立てる。 毎時間の授業の評価を積み重ね、指導や支援の見直しを図る。 「研修支援」を活用し、教科学習の改善を図る。 タブレット端末や電子黒板の利点を生かし、個々に応じた活用をする。	①②③	B	○児童の実態を踏まえ、情報を共有することで支援の方向性について職員間で確認することができた。教科学習やICT機器活用についての校内研修等を行い、児童の個々に応じた支援を工夫するよう努めた。 ●ICT機器の活用については、児童の実態に応じて様々な方法があるので今後も研修を続けていく必要がある。 ◇学部会等でもICT機器の活用例や教科学習の支援の方法について情報共有をしていく。

小学部	児童が安心して学ぶことができる教育環境を整えると共に、健康で豊かな社会生活を送るための基盤となる、基本的生活習慣を身に付けるための指導を充実させる。	児童の健康管理に努め、保護者との情報交換を密に行い、安全に学習できる環境を作る。感染症対策をしっかり行い、教育環境を整える。児童の変化や意思を汲み取り、配慮することで、安心して学びに向かうことができるよう心理的安定を図る。	④⑤⑥ ⑪	B	B	○連絡帳や電話等で健康状態や支援の方法等、保護者と情報交換をしっかりと行い教育環境を整えることができる。 ●児童の体調面に関しての対応が様々あるため、個に応じた対応していく必要がある。 ◇養護教諭等とも確認しながら、様々な状況を想定した対応ができるように職員間で情報共有をしている。
	地域の中で主体的に生活するために、人や物とかかわる力や自分を表現する力を育む教育活動の充実に努める。	様々なことに自分から挑戦する機会を設け、振り返りを行うことで自信や自尊心を育む。ＩＣＴを活用したりホームページや作品展で学習の成果を発表したりするなど、工夫して地域との連携を進める。 地域交流や学校間交流、ゲストティーチャーの活用等を通して、地域の人たちとの関わりをもてるようにする。	⑦⑧⑨ ⑩⑫	B		○全年度でゲストティーチャーを活用し、学校以外の人や様々なものに触れる機会を設定することができた。学習の様子なども計画的にホームページに掲載することができた。 ●交流等が間接的なものが多かったので、直接かかわることが難しかった。 ◇学校間交流の方法等を検討し、直接かかわりが持てる場を少しでも設定できるようにしていく。
1 年	児童一人一人の特性や発達段階を把握し、人や物とかかわりながら学習活動に取り組みもうとする力を育てられるような支援に努める。	複数の教員による日常の観察記録、授業評価をもとに、話し合いによる情報交換を行い、多面的な実態把握、授業の改善に努める。	①②	B		○児童一人一人の生活や学習の様子について話をしたり記録したりして、情報交換しながら実態把握に努めた。放課後や課程会などで活動内容や教材などを検討しながら授業づくりをした。 ●他の課程の児童については、接する場面も少なく実態や授業について把握しきれない部分があった。 ◇特別活動や日常生活、学年の授業などで他の課程の児童とかかわる時間を設定する。
		障害特性に合わせ、個に応じた教材・教具・ＩＣＴ機器を使った授業の工夫や学習内容及び学習形態の整備を行い、授業内容の充実を図る。	①②③	B		○一人一人の目標を目指しもてる力を活用し発揮しながら取り組める活動内容や教材を設定して充実した授業が行えるよう努めた。 ●ＩＣＴ機器を取り入れることで、興味や関心、注目を引くことができたが、扱いに戸惑う場面も多く、良さを活かしきれない面もあった。 ◇児童の学習をサポートできるようにＩＣＴ機器の活用の仕方について、実体験や具体的な操作の大切さと組み合わせながら効果的に活用できるよう工夫していく。
	児童一人一人の健康や安全に配慮し、心の安定を図りながら、学校生活のリズムに合わせた基本的生活習慣の確立に努める。	安全に学習に取り組める環境作りに努める。授業の流れの一元化や活動の終始の明確化により、見通しがもちやすい日課の設定と、長期間の継続した取り組みを行う。	①②④ ⑥⑦	B	B	○教室環境や、児童の健康状態、かわり方などに気を配りながら安全に過ごせるよう努めた。学習の始めと終わりの挨拶を統一して行ったり、実態に応じて部分的に日課を固定したりしたことで、学校生活の流れに見通しをもちながら落ち着いて活動に取り組むことができた。 ●児童一人一人ができることを増やせるよう、先を見ながら支援していく必要がある。 ◇引き続き環境を整えるとともに、学校生活全体を通してかわりを大切にしながら、一人一人に必要な支援を考え、行っていく。
		児童の健康管理に努め、家庭との情報交換を密に行い、必要に応じて外部専門家、医療相談との連携を図り、より一人一人の実態に合わせた支援に努める。	①②④	B		○連絡帳や電話等で細やかに情報交換をし、安全に学校生活を送れるよう努めた。必要に応じて保護者を通して主治医の指示を得たり、外部専門家のアドバイスを参考にしたりしながら支援を行ってきた。 ●学年を超えて対応していくべき案件が多々あった。 ◇部主事や保健室、保健主事、看護職員、管理職とも日頃から連絡相談をし情報を整理しながら共通理解を図っていく。
	身近な人との信頼関係を築き、情緒の安定を図りながら、自分を表現する力や人と関わろうとする気持ちを育てる。	将来の社会参加につながるよう、人や物にかかわる体験を取り入れ、かわりを楽しみながら取り組むことができるような授業づくりを、積極的に行う。	⑦⑫	C		○一緒に学習する教師や友達への意識の高まりが見られ、自分の気持ちや考えをそれぞれの方法で伝えようとする場面が見られた。 ●それぞれの実態に応じ、より良いかわり方に課題が見えてきた。 ◇色々な人とかかわりの中で信頼関係を深めつつ、教員がそれぞれの児童とのかかわりのなかで感じた気になる点などを話し合いながら、一人一人の課題に応じた支援をしていく。
	児童一人一人の障害特性や発達段階を考慮し、人や物にかかわりながら主体的に学習活動に取り組めるような支援に努める。	障害特性に合わせ、個に応じた教材・教具・ＩＣＴ機器を使った授業の工夫や学習内容及び学習形態の整備を行い、授業内容の充実を図る。	①②③	B		○各課程で実態に応じた教材・教具・ＩＣＴ機器を使った授業を行うことができた。それによって児童の興味・関心を高め、学習に意欲的に取り組むことができた。 ●来年度からⅡ課程の児童が一人になり、図画工作が学年での取り組みになると、実態差が大きいため同じ学習内容で児童の主体的な学習活動を目指すことが難しい。 ◇児童の実態に応じた学習内容を計画し、取り組むことができるように学習形態等検討していく。
	児童一人一人の健康や安全に配慮するとともに、保護者や関係機関と情報を共有し、体調を整えて学校生活を送れるようにする。	児童の健康管理に努め、保護者との情報交換を密に行い、必要に応じて外部専門家、医療との連携を図る。	④⑥	B	B	○保護者との情報交換を密に行い、その都度児童の体調を考慮した支援を行うことができた。 ●年度途中で医療的ケアの対象になった児童があり、実施までの手続きが年度をまたぐことになる。 ◇保護者、関係機関との情報交換を密にし、学年職員間で共通理解をしっかりと行い、来年度へ引継ぐ。
	地域の方とのかかわりの中で将来の自立と社会参加につながるよう経験を広げていく。	ゲストティーチャーや出前授業などを活用したり、学校間交流で同年代の児童とかかわる機会を設けたりすることで生活経験を広げられるような活動に取り組む。	⑦⑫	B		○ゲストティーチャーや出前授業で地域の方とかかわりながら経験を広げることができた。地域交流では間接交流ではあったが作ってもらったおもちゃで遊び、お礼の手紙を送る等のかかわりをもつことができた。 ●コロナ禍でこれまでできていた校外での活動ができなかった。 ◇校外での活動ができないうち状況でもリモート等を活用し、児童が主体的に活動できる内容を検討していく。（働く人に質問したり、働く様子を見せてもらうなど直接やりとりする機会を設ける等）
	児童一人一人の障害の特性や発達段階に基づいて個々の課題を的確に把握し、人や物にかかわりながら主体的に学習活動に取り組む態度を育む。	チームティーチングによる多面的な実態把握と情報共有を元に、個々の目標や評価の視点を明確にするとともに、逐次評価・改善する。	①②	B		○児童の課題や実態の変化などについて、その都度情報共有しながら指導に当たることができた。 ●授業の活動記録表をうまく生かしきれなかったが、写真や連絡帳に残した記録の様子などを活用した。 ◇使いやすい記録方法を用いて、児童の健康や実態について記録していく。
		対話的な授業や、人とかかわりに配慮した指導場面を設定する。また、ＩＣＴ機器を活用したり、教材・教具を工夫したりすることで、「やってみたい」「できた」という思いをもつことができる授業づくりを行う。	①②③ ⑦	B	B	○実態に応じたコミュニケーションの指導を行うことができた。また、タブレット端末のアプリを活用して興味、関心を引き出したり、分かりやすい授業づくりに努めることができた。 ●自発的な動きが少ない児童に対して、自分の力で授業に参加できる支援方法、教材・教具の工夫を引き続き行っていた。 ◇ＩＣＴ研修や、過去の実践例などからヒントを得て工夫する。
	保護者や関係機関と連携し、児童の教育的ニーズについて共通理解を図りながら、基本的生活習慣確立の基礎を養う。	児童の健康管理や個別的教育支援計画に基づく課題について、連絡帳や面談を通して話し合い、一人一人の実態に合わせた支援に努める。関係機関での取り組みについても情報を共有していく。	②⑩	B		○連絡帳や送迎時、電話連絡などで情報交換をしたり、医療相談を行ったりして、体調や指導方法について共通理解を図ることができるよう努めた。 ●体調の認識や学校での対応について、教員と保護者で考えの違いが見られることがあった。 ◇学校での様子を記録して伝えたり、必要に応じて関係機関と連携を図ったりする。
小学部	保護者や関係機関と連携し、児童の実態や課題を確認しながら、基本的生活習慣の確立を目指した指導を行う。	連絡帳や個別面談を通して、児童の目標や課題について保護者と話し合い、連携を図るとともに、関係機関とも情報を交換していく。	①②⑦	B		○連絡帳を中心に、必要に応じて電話や送迎時に対面で児童の学校や家庭の様子を伝え合うことで、連携をとることができた。関係機関とは、主に児童が下校時に利用する事業所と引き渡し時に情報交換を行うことができた。 ●主に児童の体調面について、保護者や関係機関と、学校側で認識に相違が見られることが多々あったため、繰り返し、児童の様子や学校でのルールをていねいに伝えて理解を得た。 ◇連絡帳だけでなく、電話や対面での話の機会を大切にして、意思疎通を図っていく。

	4 年	児童一人一人の障害特性や発達段階を的確に把握し、人や物にかかわりながら学習活動に取り組む態度を育む。	複数教員による実態把握と情報共有を元に、日常生活や授業において人や物とかかわる場面を設定し、逐次評価・改善する。	①②⑧	B	○発達段階チェックリストを活用した実態把握をしたり、学年会や課程会時に情報共有を行うように努めた。また、児童同士が関わる場を設定することで、自分から友達にかかわろうとする姿や、友達や教師に興味をもち、じっと様子を見る様子が見られるようになってきた。また、体験的な活動を多く取り入れることで、物に対する関わりも抵抗なく受け入れられるようになってきた。 ●学年の授業で、より多くの関わるの場を設定できると良かった。また、各課程でどのような授業をしているのかを、より、共有できると良かった。 ◇学年会で各課程の様子を共有する時間を設けるなど工夫していく。
			ICT機器の活用等、障害特性に合わせて教材・教具を工夫することにより、授業の充実を図る。	①②③	B	○校内研修等を通し、教員それぞれがICT機器への理解を深め、教材を作成し、授業で活用することができた。(フリンガーボードやミライタッチなど) ●ICT機器に関して、障害に応じた活用という点では、まだ研修の必要がある。 ○ICT機器のみでなく、今後も体験活動とバランスをとりながら、授業を充実させていきたい。
	5 年	児童の実態や指導目標について保護者と確認するとともに、関係機関と情報を共有し、将来の生活に向けた基本的な生活習慣の確立を目指した指導を家庭と連携して行う。	関係機関との情報交換を行うとともに、連絡帳や面談を通して個別的教育支援計画に基づく課題について話し合い、学校や家庭での具体的な取り組みについて連携を図る。	①②⑦	B	○連絡帳や面談、送迎などの機会を通して、適切な課題や取り組みについて相談や情報交換をして、連携をとることができた。 ●保護者の勤務時間や児童の入院などの理由により、連絡にやや時間を要することがあった。 ◇複数の連絡先や連絡手段を確保することにより、密な連携と迅速な対応に努めていく。
		児童一人一人の障害特性や発達段階を把握し、人や物にかかわりながら主体的に学習に取り組む態度を育む。	複数教員による実態把握と情報共有を元に、自立活動やグループ授業、日常生活等、人や物とのやりとりやかかわり方に配慮した指導場面を設定して逐次評価・改善する。	①②	B	○健康状態や身体機能などについて検討が必要なケースにおいて、主治医との医療相談や外部専門家相談を実施し、適切な配慮や取り組みにつなげることができた。 ○各種アプリやスイッチ教材を使用し、教科学習や自立活動などで、実態に応じた主体的な活動を引き出すことができた。 ●指導の評価や改善方法について必要に応じて話し合ったが、話し合いをもつ機会を予め設定することが望ましい。 ◇学年会や課程会等に指導の評価、改善についての話し合いの機会を定期的に設定していく。
			ICT機器の活用等、障害特性に応じて教材・教具を工夫することにより、授業の充実を図る。	①②③	B	
		一人一人の障害の状態や発達段階、心身の状況を把握し、個に応じた指導内容や方法の充実に努め、人や物と主体的にかかわる力を育てる。	ICT機器の活用など、障害の特性や状態に応じて教材・教具を工夫したり教科間の連携を図ったりしながら、個に応じた指導の充実を図る。	①② ③⑦	A	○ICT機器の活用や教材・教具を工夫することで、活動に取り組みやすくなったり意欲的に取り組んだりすることができた。また、教材・教具や提示方法を工夫することで、目標を達成することができた。 ●I 課程については、各教科の知識・理解が横断的につながり、生活や活動に活かせるよう、教科担当者間で情報交換や合同授業などさらに連携を深める必要がある。 ◇授業や諸活動ごとに、どの場面のどのような姿が主体的な姿なのか、職員間で共通理解をもって指導・支援に取り組んでいく。
	6 年		観察や複数教員による情報収集、授業評価の蓄積等による多面的で確かな実態把握と情報共有を基に、人や物とかかわりややりとりに配慮する場面において、逐次評価・改善を行う。	①②⑦	B	○話し合いでは、自分の気持ちを自分なりの方法で伝えたり、友達の気持ちや意見を聞いて、考えたり、相談したり譲ったりするなど、折り合いをつけることができるようになってきた。友達同士のトラブルの際は、どうしたらよいかを考えたり譲ったりする態度がみられ、相手を思いやる気持ちが育っている。 ●学年の授業が少なかったため、他課程の児童と触れ合う時間が少なかった。 ◇今後も、丁寧な実態把握と職員間の情報共有、共通理解をもって、児童が人や物と主体的にかかわる力を育てられるように場面設定を行う。
		保護者や関係機関と連携し、体調面や目標や指導の方向性、課題等を確認し、将来の生活に向けて基本的な生活習慣の基礎を養う。	健康で安全な学校生活が送れるよう、体調や生活上の変化について保護者との連携を図る。また、学校での学習や活動の様子を具体的に伝え、課題となることについて家庭との共通理解を図る。	②⑥⑦	B	○連絡帳や電話、個別面談等で保護者と情報を確認・共有したり、職員間で共通理解を図ったりしたことで課題や指導の方向性が明確となった。 ○毎日の継続した取り組みを通して、できるようになったことが増え、基本的な生活習慣が身に付きつつある。難しいときには、工夫や改善を自分なりに考えるように促すことで、できることは自分です。自分から取り組むなどの態度がみられるようになった。 ●I・II 課程の児童は、体育の時間以外にも、体をストレッチしたりリラックスできたりする時間を確保できるとよかった。 ◇短時間でも体を動かしたりストレッチをしたりする時間を設定する。 ●言葉遣いについては、不適切さには気付いている様子がみられ、今後も継続して指導・支援していく。 ○異性とかかわりについては、個別に応じて、今後も継続して指導・支援が必要である。
			保護者、関係機関と連携して情報交換を行い、指導内容やそれぞれの役割を確認し、指導や支援の充実を図る。	②⑦	B	○保護者や関係機関と情報交換を密に行い、指導に活かすことができた。 ●連絡が取りにくかったり話の内容が伝わっていないかよく分からないことがあった。 ◇保護者や関係機関との信頼関係を損なうことのないよう、丁寧な情報交換や対応を心がける。
		教育的ニーズの把握に努め、一人一人の課題に応じた個別の指導計画の目標を設定し、個に応じた支援、指導の充実を図る。	個別面談などを通して教育的ニーズを把握する。PDCAサイクルに基づき、一人一人の実態把握及び目標を設定し、個に応じた指導による授業実践を行う。また、生徒の可能性を引き出せるよう授業等の評価改善を行う。	①②③ ⑦⑧	B	○実態に応じた縦割りグループを編成することで、個別の指導計画の目標に沿った課題を設定した授業計画を立て、個に応じた指導や支援を行うことができた。また、II 課程においては、授業ごとに担当教員が授業の内容を記録し、評価し、課題を見直していくなど、一人一人の課題に合わせた指導をPDCAサイクルに基づいて行うことができた。 ○II 課程における指導についてA部門との共同学習を検討し、今年度は、体験を行うことができた。 ●A部門との共同学習について、教科を絞って検討していく。 ○教科の指導における課題の設定の仕方などについて要請訪問など学部全体で研修を行う事で指導の仕方が向上していった。 ●◇今後も要請訪問を継続していくことで研修を重ねていきたい。
中学部		育成を目指す資質・能力の柱に基づき、実態に応じて目標や内容を整理し、教科指導の充実を図る。	各教科の基礎的・基本的事項の習得を目指し、タブレット端末及びデジタル教材等を効果的に活用して学習意欲を高める授業を行う。また、体験的な学習や他者との協働により、自己選択や自己表現を促す指導を行う。	①②③ ⑦⑧	B	○職員研修などを利用して、ICTの活用方法や指導方法などを研修し、全体で共有することができたことで、職員の間で、さまざまな場面でタブレット端末を使用したり、ICT教材を使用したりすることができるようになってきた。 ●ICTを活用した授業が増えてきたが、効果的にICTが活用できていない場面が見られる。 ◇要請訪問や学部研修などを通してICT研修などを行い、具体的な場面での使用の仕方などの研修を行っていくようにする。
		家庭や関係機関と連携しながら、将来の自立と社会参加に必要な知識、技能、態度を培い、生きる力を育む。	生徒や保護者のニーズや実態を把握し、進路指導部と連携して必要な情報提供を行い、将来の進路選択につなげる。家庭や関係機関と連携しながら、将来の自立に向けた支援、指導に取り組む。	①②⑦ ⑧	B	○1学期の学部懇談会において進路研修会を企画したことで、保護者と進路について個別面談などで話題に出やすくなった。 ○高等部と連携し、高等部の見学、進路についての出前授業、ジェンダーについての学習などを行い、生徒の自立のための学習を設定した。 ●進路研修会などに参加しない保護者に対して、資料の提供は行ったが、不十分だった。 ○進路研修会については、動画での配信も検討していく。また、生徒たちの行っている進路学習についても保護者に内容を提供することで、家庭との連携を深めていく。
		生徒一人一人の障害特性や心身の状態を把握し、個別の指導計画に基づき、指導と評価の一体化を図る。	一人一人の障害特性や発達段階をもとに目標を明確にする。個別の指導計画を学年や学習グループで共有し、それに基づいた学習活動の評価と改善を行い、個に応じた支援、指導の充実に努める。	①②③ ⑦⑧	B	○個別の指導計画の目標を、一覧表にして学年で共有したり、ファイルに貼って縦割り学習の際に確認したりすることができた。目標に対する評価をその都度記入していくことで、記録を蓄積して実態を適切に把握したり、改善に役立てたりすることができた。 ●登校できなくなった生徒への学習保障が十分に行えなかった。 ○生徒の心身の状態は変化していくため、その都度実態を正しく把握し、課程と連携しながら支援の方法を工夫改善していく。

中学部	1年	教材や指導の方法を工夫し、教科指導の充実を図る。	対話による学習活動を展開し、ICT機器を効果的に活用することで、生徒の意欲喚起、理解の深化を図る。また、学習活動の中で自己選択、自己決定していく場面を設定する。	①②③ ⑦⑧	B	B	- ICT機器を効果的に活用することで、生徒の学習に対する意欲を喚起したり、視覚的に分かりやすくして理解の手助けとしたり、書字の負担軽減を図ったりすることができた。 - 学習の中で自己選択、自己決定する場面を設けることで、意思表示を促し、生徒の考えや好みを大切にすると指導を行うことができた。 ●I 課程は一人のため、教師との対話や本との対話が主で、多様な意見に触れさせることが難しかった。 ◇学習形態や発問の方法を工夫し、より充実した教科指導を行えるように研修を積んでいく。
		将来の社会参加に向けて、様々な学習活動の中で社会性を高め、人やものにかかわる力を育てる。	家庭や関係機関、保健室、看護職員と連携し、健康状態の把握に努め、安全な学習環境づくりをする。学習活動の中で、生徒同士のかかわりや、生徒が自分から相手に働きかける場面を設定する。また体験的な学習活動を多く取り入れ、たくさんの人やものに触れる機会を作る。	①②⑥ ⑦⑧	B		◇生徒同士のかかわりや体験的な学習活動を多く取り入れることで、生徒の五感に訴え、気持ちの表出を促したり、受け入れられる人やものの範囲を広げたりすることができた。 ◇今後も家庭と情報で共有し、医療相談や保健指導主事、看護職員との話し合いを通して、生徒への対応を見直し、より安全な学習環境づくりに努めていく。
	2年	生徒一人一人の障害特性や心身の状態、教育的ニーズを把握するとともに、支援計画及び指導計画に基づいた学習指導、支援の充実を図る。	学年及び学習グループ担当者間で、生徒の実態、学習内容や方法等について共通理解を図りながら、日々の授業実践の工夫、改善に努める。適時、ICT機器を活用しながら学習の定着を図る。	①②③ ⑦	B		◇個別の指導計画の目標を各課程の教職員で共有することで、学習の手立てに生かし評価に繋げることができた。また、学年会や課程会を通して、実態を的確に把握することで、個にあった教材の準備や学習内容等を工夫することができた。 ●II 課程においては、興味関心、習熟度、学習スピード等の個人差に応じた支援の工夫が必要である。 ◇タブレット端末やスイッチ教材を用いた活動や使用方法の工夫により、生徒の自己表現の選択肢を広げることができた。今後も生徒の実態の変化に合わせた学習環境と支援方法の情報共有に努めていく。
		生徒の健康状態や体調の変化について、細やかな観察を行いながら、安全で安心な学習環境づくりを行う。	家庭や関係機関、保健室、ケアルームと連携し、健康状態の把握に努めるとともに、教育間で共通理解を図りながら、個々の生徒が活動に取り組みやすい学習場面の設定に努める。	②④⑤ ⑥	B	B	◇健康で安全な学校生活を送るために、体調面や生活面での変化について保護者との連携を図りながら、その程度、気になった点は対面、電話連絡、連絡帳で情報を共有することができた。 ◇ヒヤリハット等があった場合には、放課後の学年教職員ミーティングにより、原因、対応、改善策について共通理解を図り、その後の未然防止に努めるようにした。引き続き、放課後のミーティングを実施していくことで、安全で安心な学習環境に努めていく必要がある。 ◇緊急対応マニュアルを学年教職員で見直し、安全な学習環境に努めることができた。 ●生徒に応じた活動しやすい、より安全な学習スペースの確保に努めていく。
		将来の自立や社会参加に向けて、様々な学習活動を通して、社会性を身に付けるとともに、自ら人やものにかかわる力を育てる。	生徒同士や教員とのかかわりを通して、互いに思いやり、協力し合える場面や興味関心のあるものにかかわる時間を設定する。	①②⑦ ⑧⑨⑩	B		◇校外学習や遠足は、生徒の実態や安全面に配慮し体験的な学習を実施することができた。 ◇スポーツ大会や縦割り授業を通して学年や他学年の生徒と関わりがもてるよう取り組んできたが、休み時間を活用するなど、さらにお互いを意識しあえる場の設定が必要である。 ●進路や卒業後の生活について、保護者が見通しをもてるよう呼びかけ、情報の提供に努めていく必要がある。
	3年	生徒一人一人の障害特性や実態把握を適切に行い、個別の指導計画に基づいた指導の充実に努め、自分から進んで学習活動に取り組む力を育てる。	複数の教員間の情報交換やアセスメントの活用などを通して、生徒の実態や課題を多角的に把握できるようにする。また、外部専門家も活用していく。タブレット端末やデジタル教材などの活用を積極的に行い、生徒が自ら学習活動に取り組める工夫を行っていく。学年及び学習グループで、個別の指導計画に基づいた学習活動について評価と改善を行い、授業の充実に努める。	①②③	B		◇生徒の実態について、学年会などで情報交換し、諸検査を実施することで、生徒の課題について様々な見方をすることができた。 ◇タブレット端末やデジタル教材を活用することで、生徒の一人一人の実態に合った学びを行うことができた。 ●ICT機器の使い方について、PWPをKEYNOTEで作ることに個人差があり、研修の必要性がある。 ◇学年単位でも研修していけるようにする。
		生徒一人一人の疾病の状況や、日々の体調の変化について細やかな観察及び情報共有を行い、安全で安心な環境を整える。	保護者や養護教諭、看護職員、主治医などと情報の共有を密にし、生徒の健康状態の把握に努める。教員間で共通理解を図り、緊急時の対応や安全管理等の徹底に努め、安全で安心な環境を作るようにする。	④⑤⑥	B	B	◇生徒の日々の体調の変化について、連絡帳や電話など頻繁に保護者と連絡をすることで、共通理解し、安全で、安心な学校生活を送れるようにした。 ●保護者と学校、関係機関とで意見交換する場をもっと設ける必要がある。 ◇医療機関や保護者、放課後デイケア等の関係機関と連携し、支援方法や服薬等の共通理解を図ることができるとともに、引き続き、連携して支援にあたっていく。
		家庭や関係機関と連携しながら、生徒一人一人の状況に応じた進路指導を行う。	家庭の状況や生徒の実態に応じた進路選択ができるよう情報収集に努める。施設の紹介や高等部での学習についての情報提供を行う。高等部入学者選考について適切な事務処理を行う。	⑦⑧	B		◇個別面談、学年懇談などを通して、今後の進路について話をする機会を多く設定した。 ◇入学者選考については、保護者が不安を持たないように丁寧に説明するようにした。 ●高等部卒業後のイメージを保護者と担任が共有することが難しかった。 ◇高等部の保護者の話を聞く機会の設定など、高等部がイメージできるような機会の設定を考えていく。
高等部		生徒一人一人の心身の状態や生活経験を考慮し、基礎的・基本的な学習の定着を図るとともに、社会生活に必要な知識や態度の育成を図る。	生徒の実態や面談を基に、個別の指導計画等において生徒にとって優先すべき目標を具体的に立て、毎時間の評価を積み重ねる。評価について教員間で共通理解を図り、次時の指導に生かす。また、PDCAサイクルに基づき、授業を振り返り、改善することでそれぞれの専門性の向上に努める。授業の中でデジタル教材や電子黒板を活用できるようICT研修を通して指導の充実を図る。	①②③ ⑤	B		◇保護者面談や日々の学校生活の様子から複数の教員で生徒の実態を把握することにより、生徒の進路を見据えた具体的な目標を立てて実施することができた。デジタル教材や電子黒板を活用して視覚的教材を生徒に分かりやすく提示することで、イメージを持ちやすくしたり、生活経験の不足する部分を補ったりして、学習の定着につなげることができた。 ●生徒一人一人の課題やできることを伸ばすための題材設定や支援方法を検討し、次時の授業改善につなげることが難しかった。 ◇中長期的な目標だけでなく、単元ごとや毎授業で個人目標を立て、生徒一人一人に適したアプローチを考え、スモールステップで成果を積み重ねられるようにしていく。
		一貫した指導支援を行えるよう教員一人一人が生徒の健康維持への意識を高めると共に、安全な教育環境を整える。	生徒一人一人の実態を客観的に把握し、学部会など教員が共通理解を図る機会を設けることで一貫した支援を行えるようにしていく。感染症対策や緊急時シミュレーション等を行うことで、安全な教育環境を整えたいよう努める。	①②④ ⑤⑥	B	B	◇学部会などで生徒情報の共通理解を図り、学年を超えて支援することで実態を把握し、一貫した指導支援につなげることができた。 ◇緊急時シミュレーションを各学年で行い、他学年もオンライン参加することにより実施方法や反省点を共有し、学部全体で生徒の健康維持や安全な教育環境への意識を高めることができた。 ●慣れてくる時期に気がゆるみ、事故の可能性が高まる。 ◇危険意識を高めて未然に防げるよう定期的ヒヤリハットを共有し、定期的に学部や学年で注意喚起したり、緊急時対応を確認したりする。
		自立と社会参加に向け、キャリア教育の充実を図り、進路想定に基づいた進路学習や進路指導の充実に努める。	通常の授業や実習の事前・事後学習を通して、生徒の課題を明確にし、課題解決に向けて取り組む。生徒が自分で考えたり自己決定したりできるよう様々な学習の中で選択したり自己決定したりする場面を設ける。現場実習や校内実習で評価を行い、生徒の学習や教員の指導にフィードバックする。また、生徒が主体的に進路を決定できるよう関係機関や保護者と情報交換を行うことで信頼関係を構築し、連携する。	①②⑦ ⑧⑩	C		◇校内実習や現場実習を通して明確になった課題を、日々の学習や第II期実習の活動に生かし、個々に必要な指導・支援を行うことができた。 ◇関係機関等と情報交換したり、卒業後の生活を具体的にイメージできるよう出前授業を活用したりして、生徒が主体的に進路決定できるよう進路指導を充実させることができた。 ●進学の手続きの流れ等がわかりずらく、一部の教員に負担が多かった。 ●キャリア教育の側面から中学部と連携し、よりよい進路選択につなげる必要がある。 ◇進学に関する流れを明文化し、進学と就労の流れを学部内で周知し、進路指導部と連携しながら、一貫した進路指導ができるようにする。 ◇進学・就労、生活介護など様々な進路想定の中で、生徒の実態に合った進路選択ができる機会を設定したり、学習内容を精選したりする。
		卒業後の社会生活に向け、生徒一人一人の課題を的確に把握し、ICT活用を含めた教材教具及び支援方法を工夫改善することで、学習内容の定着を図るとともに、社会生活に必要な技能の育成を図る。	発達検査やアセスメントツールを用いた多面的・多角的な実態把握を基に目標設定を行い、課題学習シートや略案を活用することで、生徒個々の「目標～評価」を共通理解しながら授業を実践していく。	①②③ ⑤⑩	C		◇社会生活に向けて、保護者と相談しながら日常生活上の支援方法を精選して実施できた。 ●各生徒の実態にあったアプリを検討し、更に個人所有のタブレット端末を活用していきたい。 ●III課程において授業内容が重複してしまうことがあった。 ◇長期休業を利用し、保護者にアプリのダウンロードの協力を依頼していく。 ◇教科化される美術及び生活・鑑賞表現の学習内容を整理していく。

高 等 部	1 年	生徒が安心して学校生活を送れる教育環境を整え、教員間の情報共有の習慣化を図るとともに、一貫した支援を行う。	緊急時シミュレーションをもとにマニュアルの見直し・整理を行う。また、ヒヤリハット事例を共有したり、教室環境を日常的に整理整頓したりして事故等の未然防止の意識を高める。教員間のコミュニケーションを大切に、報告・連絡・相談をしやすい関係性を維持していき、学年として一貫した支援方法を検討し、実践していく。	④⑥	C	C	○学年会を通して、情報の共有ができた。特に必要な生徒は、書面で回覧を実施した。 ●新入生のため、支援方法の共通理解を図るのに時間がかかった。 ◇次年度に向け、摂食介助・水分摂取や移乗方法など、動画に残しておくことで情報のスムーズな共有を図る。
		社会生活に目を向け、進路を意識した学習に取り組むことで、生徒が自身の個性を生かし、持てる力を発揮しようとする態度を育成する。	進路指導係と密に連携を図りながら、進路情報の収集を行い、生徒の個性を生かせる学習内容やこれまで身に付けてきた力をより般化できるような指導方法を検討、実践していく。また、実習等を活かしながら生徒自身が自分の得意な分野に気付く場面を設ける。	①② ⑦⑧	B		○進路に関する出前授業を実践できた。 ○校内実習においては補助具等を活用し、一人一人が主体的に作業に参加できる部分が増えた。 ●高に高等部未経験者が多かったので一部の職員に負担が多くなった。 ◇校内実習の共通理解、係分担の工夫、誰でも担当できるシステム作りをする。
	2 年	生徒一人一人の課題を的確に把握し、個々に合わせたより具体的な目標設定と教科横断的な指導をすることで、自立に向けた基礎的な力を養う。	個別の諸計画等を活用し、客観的根拠に基づいて実態把握を行っていく。そこから具体的な目標を作成するとともに、明確な評価規準を設定し学習を積み重ねていく。また、身に付けた力を社会生活において般化できるように日常生活場面をイメージしながら指導を行う。	①②⑤ ⑦⑫	B	B	○保護者からの情報によって個別の諸計画を随時修正していくことで生徒一人一人の実態を適切に把握し、指導に活かすことができた。 ●自立活動の目標を中心とし、卒業後を見据えた教科横断的な目標を設定できるようにする。 ◇来年度から教科化される美術と自立活動の目標の違いを明確にする。
		コロナ禍での教育活動を見据え、生徒の健康への意識を高めるとともに、安心、安全な環境整備を図る。	コロナ禍における新しい生活様式の徹底と、状況に応じた生活様式の見直しをするともに、一人一人の配慮事項などの共通理解を図り、情報を速やかに共有することを習慣化していく。	②④⑤ ⑥⑧	A	B	○緊急時シミュレーションを実施し、指導方法の見直しをすることができた。 ●コロナ不安から登校できない生徒への学習機会について検討をする。 ◇新しい生活様式の見直しを引き続き行っていく。
		卒業後の生活を意識し、進路想定に基づいた具体的な活動を実践する。	現場実習等を通して、卒業後の具体的な社会生活をイメージし、日々の学習活動の改善を行う。また、卒業後の進路先で必要とされる力について教師、保護者間で共通理解を図り、一貫した指導に努める。	①②⑥ ⑦⑧⑫	B		○卒業後の具体的な生活をイメージし、目標を設定して現場実習を行うことができた。 ●現場実習での評価により、現場実習で見つかった課題を学校生活の中で見直しし、新たな課題を見出していく。 ◇各学期の学年懇談時に進路の話題を提供し、学校・家庭との連携を図る。
	3 年	生徒一人一人実態を的確に把握すると共に、社会生活に向けて個々の持てる力を伸ばせるよう、適切な目標を設定した学習を実践する。	個別の指導計画や支援計画を活用し、的確に実態把握して目標を設定する。また、日々の生活の様子を客観的に評価するとともに、現場実習の評価を教員間で共有し、日々の学習に活かすことで、卒業後の社会生活に必要な態度や能力が育成できるようにする。	①②③ ⑦	B	B	○個別の指導計画や複数の職員の観察などからより客観的な目標設定を行うことができた。 ●現場実習での評価内容すべてを日々の学習にフィードバックするのが難しかった。 ◇卒業後を見据えて、取り組む課題を精選して確実に学習に生かせるようにしていく。
		健康維持のため、日々の健康観察を徹底しながら一貫した支援を行い、緊急時にも迅速な対応がとれるよう共通理解を図る。	生徒一人一人の保健関係の基礎情報の共有を図るとともに、情報の確認が必要な際に即座に対応できるような環境の整備を行う。緊急時対応マニュアルの定期的な確認や物品の管理など、有事の際を想定した準備を日頃から行っていく。	①②④ ⑤⑥⑨	A	B	○日々の観察を徹底することで、緊急時など一貫した対応をとることができた。 ●緊急時の情報伝達で、情報が錯綜してしまい連絡が重複してしまった。 ◇緊急時のマニュアルに沿った行動とともに声出し確認など基本的な行動を徹底する。
		進路想定に基づいて、進学や障害福祉サービス利用までに必要な準備を計画的に進め、生徒一人一人に合った進路選択、進路決定を目指す。	進学については志願先の決定や受験方法の確認をして、早期に準備を始め計画的に受験に取り組めるようにする。障害福祉サービス利用については、それぞれのサービス内容の確認や事業所の受け入れ状況、現場実習の評価などを踏まえ、保護者の意向に沿って適宜必要な助言を行う。	⑦⑧⑫	B		○卒業後の進路については、概ね希望に沿った進路先に結び付けることができた。 ●進学先の資格取得条件や事業所のサービス提供の変更など、突然の変更に伴う計画変更を余儀なくされた。 ◇不測の事態を想定し、第2案・第3案を早い段階から検討しておくようにする。
訪 問 教 育		個別の指導計画に基づき、課題に応じた授業実践の充実を図る。	体調や覚醒状態、興味関心等に応じて、学習内容や教材教具を選定し、働きかけ方を工夫しながら授業を実践する。 毎回の授業記録や、複数訪問実施後の話し合い等をもとに評価を行い、個々の実態に応じた学習内容を検討する。 児童・生徒の生活年齢に配慮し、かつ、興味・関心を引き出せるような題材設定や、教材を工夫する。	①②③	B	B	○児童・生徒の実態に合わせた補助具を活用するなどして、個々がより活動に取り組みやすくなるよう教材の工夫をした。 ●一部学部学年の授業を共有し、生活年齢に配慮しながら取り組むことができたが、学年が上がるにつれ、生活年齢と興味・関心とのすり合わせに難しさがあった。 ◇訪問担当職員との授業内容の情報交換や、児童生徒の実態の共有と評価を定期的に行い、学習内容を検討する。
		保護者や関係機関と連携し、健康や体調に配慮して学習を進める。	訪問時の健康観察や、保護者からの聞き取りを丁寧に行い、体調の把握に努める。必要に応じて関係機関と連携を図り、学習時の安全で活動に適した姿勢などについて検討する 面談等で複数訪問を実施し、複数の眼で実態把握の共有に努めるとともに、学年や進路などからも様々な情報を集め、提供していく。	①②⑦ ⑧	A	B	○授業開始時に保護者から直接または連絡ノート等を通して、その日の健康状態や家庭での様子などを聞きとり、体調に合わせて柔軟に対応した。 ○福祉事業所や相談支援員などと、保護者を通じて連携を図り、個に応じた進路情報等を提供したり、相談したりすることができた。
		学年の友達や教員との交流、様々な体験的な活動を通して生活経験を広げる。	学校行事や学部・学年の授業へのスクーリングを促す。また、日頃から動画メッセージのやりとりや、オンラインでの学習参加等を通して交流を深める。 保護者と協力し、屋外での学習機会をもったり、ホームページ等で学習の様子や作品を紹介するなど家庭での学習だけでなく、地域に広がるような取組を積極的に行う。	①②③ ⑨⑩⑫	B		○学部学年と密に連絡を取り合い、共通した教材を使用したり、作品を鑑賞し合ったりすることができた。また、複数の学年で、オンラインで繋がることができた。スクーリングも随時行い、生活経験を広げることができた。 ●学部学年との連携は意識的に多く取り組めたが、訪問生同士のつながりをもっと深められるとよかった。 ◇訪問生同士の異学年の交流を大切に、今後オンラインなどで繋がる機会を設ける。